死に神の恋

サムライ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
死に神の恋

【Ｎコード】
Ｎ９６７２Ｇ

【作者名】
サムライ

【あらすじ】
緑濃い公園に建つ、ひなびた食堂。若女将、舞はみなの人気者。猫をつれた風来坊、死に神さん、舞さんに密かに思いを寄せるが…。死に体の物書きと美人妻の恋愛騒動を通して、現代人の心に巣くう、深い孤独を浮き彫りにする。

1

『死に神の恋』１

あの方が、あんな大それたことをする人だとは、私は露ほども思っていませんでした。

私があの方に初めてお会いしたのは、もう数年前になりますでしょうか、公園の中にぽつんと建つ、この古い食堂にお嫁に来て、子宝にも恵まれ、生活に張りの出てきた頃だったと記憶しています。

私の嫁いだ先は、杉並の善福寺川緑地のはずれ、和田堀公園にあるひなびた食堂で、付近は、それはそれはとても緑が濃くて、さながら森の中の一軒家、と言った風情があるところでございます。

交通の便の悪い土地ですが、日曜日ともなれば、のんびりと森林浴を楽しむ人々や、食堂に併設された釣り堀に糸をたれるお客さんたちで、この辺りもなかなかの賑わいとなります。

ですから、かき入れ時の日曜、祝日だけは、私も店に出て厨房やお運びのお手伝いをするようにしています。はじめは気が進まなかったのですが、厨房を任されている主人や、店のオーナーである義父母に請われる形で、いつの頃からか、休日ごとに、娘の手を引き店に通うようになっていました。

「舞ちゃん、こっちビールね」「舞ちゃん、こっちサワーお代わり」「ラーメンと焼きそばまだ来てないよ、舞ちゃん」

舞ちゃん、舞ちゃん、あっちからも、こっちからもご指名で、そ

れこそ私はてんてこ舞いです。近くの球場で草野球のある日曜日は、まるで私の晴れ舞台のようです。野球服姿の団体さんが、うちの店で打ち上げをやることが多いためです。

「日曜日は舞ちゃんで持っているものね」

お義母さんはそう言って私に頼り切り。義父と主人も休日ごとに私のファンが訪れてくれるので、売り上げが上がるとまんざらでもない様子。

もっとアルバイトの健ちゃんとか、お義母さんに用事を言いつけてくれればいいのに、と私は時々主人に愚痴をこぼすのですが、休日、娘とぽつんと家にいて、まだ器量も衰えない若い身を、足早に去って行く時に、無為に任せるよりは、どれほどお店の方が楽しいでしょう、そう思い返して、ここ数年がんばってきたのです。

あの方も、もともとは私どもの店のお客さんでした。と言いましても、古いお馴染みさんではなく、いつとはなしに公園に現れ、私どもの店にちょくちょく顔を見せるようになったのです。

よほど黒い服がお好きなようで、初めていらしたときも、夏なのに黒のズボンに黒のTシャツ、靴まで黒、という出で立ちでした。季節が変わっても、秋は黒のセーター、冬は黒のロング・コート。髪だけは漆黒にかすかに白いものが混じっていらして、それがちょっとしたアクセントになり、とても良くお似合いでした。黒ずくめのあの方のことを、いつしか私たち店の者は、親しみを込めて「死に神さん」とお呼びするようになっていました。

死に神さんはひとり者でした。奥さんがいるのが当然の年なのに、別にそれを不便だとも、妙だともご自身思わずに、日曜日ごとに店

に来ては、酒をわずかに口に含みながら、何やら難しい本を読んでいます。本人が言うには、仕事のかたわら小説を書いているのだそうです。世間の評判のほどは知りません。

ただの客、と言ってしまえばそれまでです。服だけではなく、顔まで浅黒く、どこか暗い陰のあるこの方に、私ははじめ何の興味も抱かなかったのです。夫のある身としては当然のことですよね。

けれども、死に神さんの方は違うようでした。日曜日、私がいるのを確かめてから店に入ってくるのです。もちろん、主人も義理の父母もそのことに気づいておりました。それでも、酔ってくだを巻くわけでもない、物静かなこのお客さんに、店の者はみな好感を抱いていました。

死に神さんは、タクシーの運転手さんでした。日曜日でもお仕事の時があるらしくて、そう言う日は店の前に黒い車を停め、やはり黒い背広姿で店に入ってきて、酒は飲まず、カツ丼などを注文します。

黒い車、黒い背広、まるで葬儀屋さんみたいだね、お仕事中でも死に神さんはいつもの死に神さんだな、と言って店の誰しもが親しげな笑みを浮かべたものでした。

死に神さんは猫を飼っていました。何という種類なのでしょうか、短毛種で、毛並みがロシアン・ブルーに似ており、銀ねず色の美しい光沢をしていました。ただ、耳が外側にくるりとカールしていて、ちょっと見かけない猫でした。

その猫が、暗がりでドングリ眼を見開き、耳をきゅっとおっ立てたさまは、かわいらしい悪魔くん、といった風情があります。死に

神さんはこの猫にリードをつけて公園を散策するのが日課でした。

「死に神が、悪魔を連れて森を散歩していたよ」

アルバイトの健ちゃんなどは、いつもそう言って、愉快がっていました。死に神さんと悪魔君はいい相棒のようでした。

風の心地よい、五月晴れのある日、死に神さんがいつものように本を片手にぶらりと店に入ってきました。悪魔君は表の柿の木に繋がれ、日だまりでうちの犬とじゃれ合っています。つくづく変な猫です。

死に神さんはいつになくそわそわしていました。カウンターに座るなりぬる燗を注文し、それから、ポケットを探って何やら取り出し、それをかすかに震える手で、大事そうに胸に押し隠していました。

お酒をお持ちすると、じっと私の手を見つめながら、やあ、かたじけない、とばかりにちょっと片手で拝む真似をして、そのワンカップをぐいっと飲み干しました。

「もう一杯下さい」

なんともよい飲みっぷり。ちょっと驚き、またすぐぬる燗をお持ちしたときです。死に神さんが素早く私の手に封書を握らせたのです。そして、またもや、ぐいっとばかりにお酒を飲み干し、「お勘定」と短く言って立ち上がりました。

あっけにとられた私を残し、死に神さんは、帳場の義父にもどかしげに支払いを済ませると、そのまま足早に出て行ってしまいまし

た。

あわてて後を追うと、例の変な猫を小脇に抱え、振り返ろうともせず風のように立ち去って行くところでした。

私の手には、宛名も差出人もない茶色い封筒が残されていました。胸おどるような、こそばゆい予感に誘われ、みどり鮮やかな木の下で、それを開いてみますと、飾りっ気のない便せんに、ミミズが飛び跳ねているような字で、何やら詩のようなものが書かれています。

「へたくそな詩…」自称もの書きの、その実力のほどを知り、私はちょっとがっかりしました。

舞さんへ

『青葉色の君』

昔のどけき安らいの、森の料理屋に物憂く夏の陽さし、

木目あらきカウンターの、酒の玉、きららに緑なす。

軽やかにまろぶ、エメラルドの玉に、浮かぶは君が白き面、

ふっと母めいた笑みになごみ、

苦き酩酊の底闇を、やわらかに照らす。

ああ、明日、明日、明日、明日よ、

明き朝に舞う希望の言の葉、温かなその響き。

いま、色なき夜にとよむは、昨日のひやかな風の声。

昔のどけき安らいの、森の料理屋に、物憂く夏の陽さし、

ぬるき酒を運ぶ君が手は、人の世のぬくもりを、ほのかにわれに

伝え来ぬ。

すぐ破って捨ててしまおうと一瞬考えたのですが、詩の最後のところ、ぬるき酒を運ぶ君が手は…、云々、が少しだけ印象に残りました。日々、何気なくお酒を運ぶ私の手が、あの方にある種の温もりを与えていたとは、新鮮な驚きでした。

その夜、いつになく長湯をした私は、鏡台の前に座り込んで、つくづくと自分の顔を眺めてみました。

湯上がりの上気した肌は、娘時代とまったく変わらず、とても木目が細やかですべすべしています。昔からこの雪のように白い肌が私の自慢でした。

鼻はつんと高からず、低からず、小じわもなく、やや大きめの一重目は、上村松園などの美人画のそれに似ていると人にほめられたことがあります。

後ろに束ねた長い髪は淡く茶色に染めていますが、まだまだつややかで、とても張りがあります。

浮世絵に描かれた女性を、現代風にアレンジした姿、と私の形を

表現した方が以前いらっしゃいましたが、どうでしょうか、想像がつきますでしょうか。

いえ、うぬぼれに浸りたくて、こんな愚にもつかないことをお話ししているのではないのですよ。しょせん、私は亭主持ちの子持ち。お客さんたちから見れば、酔ってくだを巻くときの酒の肴にはできましても、とてもとても恋愛の対象などというものではございません。

それに、店のお客さんたちと私の間には、けじめと言いますか、画然とした高い塀のようなものがあったのです。すぐそばで夫や義父母が目を光らせているのですから当然ですよね。

ところが、あの人と来たら、その目に見えない塀を、何食わぬ顔で、のそのそと乗り越えてくるのですから。びっくりするやら、はずかしいやら、それで女としての自覚が急に甦ってきまして、鏡をじっと見ているうちに、ついつい、はしたなくも自己陶酔してしまったのです。

「ひとりで何をにやにやしてんだよ」

ぞっとして、私は鏡面の端に映る声の主を見ました。夫がいつもの人なつこい笑みを浮かべ戸口に立っています。ビーバーみたいな前歯がとても可愛い、わたしのお気に入りの笑顔です。見慣れたその笑顔に出合った途端、戦慄が背筋を冷たく駆け抜けたのは、一体なぜでしょうか。

次の日曜日、とんでもないことが起こりました。先日のお手紙は、やはりお返しした方がよいと思い、私は、朝からあの方がお店にいらっしゃるのを、いまかいまかと待っていました。

「舞ちゃん、何やってるの、3番テーブル、ラーメン上がったよ」心ここにあらずの私を、義母の声がせき立てます。そのたびに、くるくると体を動かし、精一杯立ち働くのですが、集中力が続きません。ふと、気がつくと、手を休めて、あらぬところを見つめているのです。

いったい私は何を待っているのでしょうか。心臓が悲鳴を上げているような、この激しい動悸は、果たしてどこから来るのでしょうか。私の心は混乱するばかりでした。

ちりん、ちりん。表で可愛い鈴の音がしました。あの人です。悪魔君も一緒です。

「外を片づけて、舞ちゃん、外」また義母の元気の良い声が響き渡ります。木楢の木立の下に、いくつかテーブルが置かれていて、そこで騒がしく飲んでいた野球服すがたの団体さんが、いまから帰るところでした。

いつものように黒いシャツを着た死に神さんが、私とすれ違いざま店に入ってきました。悪さを見つけられたいたずらっ子のように、目を伏せ、表情をこわばらせ、浅黒い面をちょっと赤く染めて。男臭い顔立ちをした死に神さんが、いつになくはにかむ様を見て、私は思わず頬をゆるめてしまいました。

「わはは」「何だ、このへたくそな詩は」「どこのまぬけだ」

何やら皆が騒いでいます。私はテーブルを拭く手を木漏れ日の中のに休めて、店の中をそっと窺いました。なぜか、とてもいやな予感がして、何気なくエプロンのポケットを探ってみると、「ない…、ないわ。手紙が」

顔が、さっと青ざめるのが自分でも分かりました。もしかしたら、皆はあの手紙を回し読みして笑いあっているのかも。

お盆を放り出して中に駆け込むと、店中から好奇の視線が一時に集まり、私は今度は真っ赤になってしまいました。

「おい、舞、ラブレターが届いてるぜ」夫がくすくす笑いながら私を呼びます。私は何のことやら分からない、という顔を作り、手紙をのぞき込みました。そして、はしたないくらい大きな声で笑って見せたのです。

「な、へったくそだろ」いつもカウンターの端でお酒を飲んでいる、安蔵というおじさんが、金歯をにたにた光らせて言います。

どぎまぎしてしまって、安蔵さんの二つ先に座っている当の作者を、恐る恐る盗み見ますと、新聞を大きく開いて顔を隠し、その実、両の手がわなわなと小刻みに震えていました。

「なあ、なあ、あんたもちょっと見てみろよ。たいした名作だぜ」酔っぱらった安蔵さんが、調子に乗って、死に神さんに例の手紙を渡そうとすると、かわいそうに、薄幸の詩人先生は、新聞の陰からぬっと腕を伸ばして、素早くその名作を受け取り、しばし沈黙の後に、「ははは、なるほど、これはいいや、とんだ詩人気取りですね。いやね、僕もね、多少詩を書くんですがね、これはへたくそだなあ。明日、明日、明日、明日よ、か。あすを四回も繰り返すところが味噌なのかなあ、ははは、どうもいただけませんね」などと言ってすっとぼけております。

「誰が落としたのかなあ。いや、こんな訳の分からないラブレタ

ーは、捨てた方がいい。舞さんのためにならない。うん、分かりました。いいでしょう、僕の方で責任をもって処分しときますよ」

死に神さんは頼まれもしないのに、稀代の名作を懐にねじ込むと、あっけにとられた人々を残して、あたふたと出て行ってしまいました。カウンターには紙幣が二三枚放り投げてありました。

その後ろ姿がちょっと気の毒で、またひどく申し訳なくもあり、様々な想いが一時に胸にこみ上げてきて、思わず後を追うと、死に神さんが、悪魔君を小脇に抱え、木立の奥にすたこら逃げ去るところでした。

それっきり、死に神さんは店に現れませんでした。何とも後味の悪いお別れの仕方をしてしまって、心苦しく、情けなく、そして、すこし悲しくて、私は暫くやるせない日々を送っていました。

忙しい日曜日、何も考える暇などないはずなのに、いつのまにかぼんやりと窓の外を見つめて、森の遊歩道に誰かの面影を探してしまうのは、一体どういう心持ちなのでしょうか。

お義母さんや健ちゃんは、川向こうの八幡様の丘で、死に神さんが、悪魔君と散歩するすがたを、何度か目にしたようです。蝉しぐれ降る森の中、ブナの老木の陰に足を休め、高台のベンチから、うちの店の方を、ぼんやりと眺めていたそうです。

「どうしたんだろうねえ、ひどくしょんぼりとしてたよ」と義母が話すのを聞き、精悍な顔をしてふだん周囲を睥睨する風だったあの人が、猫に引っ張られるようにして、元気なくとぼとぼ歩いている姿が目に浮かび、申し訳ないと言うよりも何だかほほえましくて、ついつい笑いがこみ上げて来るのを、私はこらえ切れませんでした。

ところが、その死に神さんがうちの店に転がり込んで来たのですから、世の中先のことは分からないと申しますか、よほど死に神にたたられていると申しますか。

あれは死に神さんが店に来なくなって数ヶ月が経った、秋の連休のことだったと思います。昼下がり、買い物から帰って店に入ると、窓際の、つり場が一望できる一番いいテーブルに、男の方が二人、こちらに背を向けて座っていました。その向かいには、いつものように野球帽を被った義父の、困惑そのもののような顔が見えます。

義父が言いました。「しかしなあ、社長、六さんの代わりと言っても、この商売だって勉強することは山ほどあるんだ。竿や餌の種類、へらブナや金魚の生態、ポンプの操作に水換え、それに食堂の仕事だってある。修業を積むにはどうしても時間がかかるんだよ」

六さんというのはつり場専門の係の人で、店の二階に住んでいる片足の不自由なおじいさんです。高齢のため近々埼玉の息子さんが引き取ることになり、義父母は代わりの人を探していました。

年格好が義父と同じくらいの、白髪頭のふとった男性が、「ずっとじゃないんだよ。一年でいいんだ。置いてやってくれよ。こいつはまじめな奴だから、仕込めば絶対店の役に立つようになるって」と言い、隣の男性の肩に染みの浮いた手を置きました。

義父は白くて太い、自慢の眉を八の字にして、なおも困惑の体です。「一年じゃねえ、仕事を覚えたところでさよならだよ」

義父と話しをしているのは、近所のタクシー会社の社長さんでした。二人は小学校の頃からの幼なじみで、今でも時々一緒に海釣り

に行く間柄です。社長さんは旧友である義父のもとに、何か難しい相談に訪れたようでした。

話題の中心は、社長さんの隣に座っている人の、身の振り方のようです。どこかで見た黒いスーツ、すこしカールした太い髪、それに、少々まるまった、陰気な背中、もしや…。私は、ある期待を込めて、社長さんの横で小さくなっている方の後ろ姿を見つめました。

「おい、舞ちゃん、お代わりくれよ」義父が私を見つけて言いました。コーヒーを替えるとき、ちらりと見た神妙な顔つきの人物は、やはりあの死に神さんでした。死に神さんは、私を見ると、いよいよ小さくなってしまい、面目なさそうに目をテーブルに落としました。

なんでも死に神さんは、交通違反の点数が重なり、暫くタクシーに乗れなくなってしまったとか。今度捕まりますと、免許取り消しになりますので、点数が回復する一年後まで、用心してハンドルは握らないそうです。ですから、タクシー会社の方も、一時退職せざるを得ません。

一方、社長さんは運転手不足に悩んでいる折から、ぜひ戻ってきてほしい、当座の仕事は見つけてやるから、と死に神さんを引き留め、巡り巡って、きょうこの席に二人で座っているわけです。

「いいじゃないか、来てもらおうよ」夫が、濡れた手をエプロンで拭きながら、カウンターの中から出てきて言いました。「どうせうちみたいな店、来てくれる人もなかなかいないよ、父さん」

けっきょく義母も賛成の側にまわり、死に神さんはめでたくうちの店で、住み込みの臨時雇いとして働くことになりました。

「一年後のことなんてわかりゃしないよ。ひょっとしたらずっといてくれるかもしれないじゃないか」と義母はあとでお義父さんに耳打ちしました。

秋晴れのある土曜日、川向こうの大宮八幡様のお社から、祭ばやしが流れてくるその日、死に神さんは、どこで借りてきたやら、古風なリヤカーに全財産を積んで店の二階へ引っ越してきました。荷物の上には悪魔君がちょこんと座っています。

夫に言われて部屋の掃除や荷物の整理は私がお手伝いしたのですが、家財道具らしきものは何もなく、布団に大量のご本、お気に入りの黒い服数点、それに猫用の食器がいくつか目につくぐらいでした。電気製品などは家賃滞納のため、アパートの大家さんに差し押さえられてしまったそうです。

新居は六さんのいた日当たりの良い八畳間で、窓からはみどり豊かな落葉樹の森と、和田堀の池が一望できます。木々がこんもりと茂る池の浮洲には、シジュウカラやムクドリ、それにカワセミなどが棲んでいて、朝には彼らの可憐なさえずりが、死に神さんの目覚まし代わりとなることでしょう。

畳と襖が古くて少しすえた臭いのする部屋ですが、落ち着く先が見つかって安心したのでしょうか、死に神さんは鼻歌などうなって上機嫌でした。悪魔君の方は押入に入ってみたり、ベッドの下に潜ってみたり、長いしっぽを振り振り、新居の探検に忙しいようです。

ご本のサイズをそろえて隅に並べながら、部屋を渡って行く、秋日和の快い風の中で、私はひとり考えていました。死に神さんに恥をかかせてしまった例の一件を、どう謝ったものやらと。

でも、人の気も知らずに、死に神さんの方は、段ボール箱の中から黄ばんだ原稿用紙の束を取り出して、自作の小説の講釈に夢中です。渡されるままにそれらを手にしてみれば、「熱海の踊り子」だの、「暗夜航路」だの、「私は猫だった」だの、「これから」だの、「あれから」だの、とにかくどこかで聞いたことがあるような、ないような、妙なタイトルのものばかりです。

「これはね、僕の作家人生の転機となった作品でしてね、この後ぼくはね、ドストエフスキーの後継者たることを自覚し、キリスト教的実存文学の研究にも力を入れるようになったのですよ」

その名作のタイトルは、「罪と罰則」でした。小首を二度ほどかしげて、「それで、このご本、どこで売っているの」と尋ねますと、急に難しい顔になりまして、「芸術家は、理解されないからこそ芸術家なんです」などと、小声でぼそぼそと訳の分からないことを言って澄ましています。

やがて、取り留めのない言葉は、互いの淡い想いのうちに、いつのまにか絶えて、がらんとした部屋の中には、ただ風のささやきだけが、かさこそ、かさこそとうずくまっていました。窓から差し込む秋の陽が、荷の紐を繰る死に神さんの手を、優しく温めています。

そのごつごつとした、たくましい手を見つめているうちに、温かな感情の堰は他愛もなく切れて、かすかに震える私の唇から、言葉が、ぎこちなく洩れて行きました。

「あの、いつかは本当にごめんなさい。わたし、頂いたお手紙を落としてしまって。早く謝りたかったのだけど、あなた、おいでにならないから」

死に神さんは、急に口元の笑みを消し、二重目を窓の外に転じる

と、長いまつげをかすかに伏せ言いました。

「僕はあなたのうちに何かを求めている。それが愛情なのかどうか、自分でも分からない。僕はあなたを愛しているのだろう。いや、愛していないのかもしれない。恋愛感情の向こうにある、何か尊いものを、僕はあなたに感じているようだ。それが何かは、いまの僕には分からない。でも、それこそが、僕が人生で探しているもののような気がする」

次の日から、死に神さんは、さっそくはりきって働き出しました。予想していたとおり、釣りの知識は皆無で、一般的な矢竹竿さえ知らず、まして浮きやおもりなど、仕掛けのセットはまったくできません。

それでも義父や夫に教わったことをいちいちメモにとり、一生懸命覚えようと努めていました。仕事に対するその一途さは、かつて失業して苦労したためのようでした。食べられなくなることへの恐怖心が、いても立ってもいられないほどに、死に神さんを肉体の酷使へと向かわせるのでした。

一方、相棒の悪魔君の方は、ご主人様が仕事の間、店の前の柿の木に繋がれ、うちのむく犬とじゃれ合ったり、蝶々やこおろぎと遊んだり、秋の木漏れ日の中でのんびりと日向ぼっこをしたり、すぐに新しい環境に慣れて行きました。物怖じをしない性格らしく、お客さんを見れば、お腹を出してごろごろと甘えます。

この辺は野良猫が多くて、餌付けをする猫好きの方が大勢いらっしゃるせいでしょうか、店先で遊んでいる悪魔君はたちまち有名になり、中にはわざわざ写真を撮りに来る方までいらっしゃいました。

女性客がにわかに増え、食堂であんみつなどを嘗める姿が目につくようになったのも、やんちゃで、ちょっと悪な、悪魔君の功績と言えるでしょう。

「まさに招き猫だね。ご主人様の倍は働くね」などと、義父も夫も人の悪いことを言いいながら、なかなかご満悦の様子です。

死に神さんの方はと言えば、にわかに人気者の主になったことが嬉しくて、「この猫はですね、アメリカン・カールという珍しい種類でしてね、そんじょそこらの猫じゃないんですよ。見てください、この外側にくるりとカールした耳を。可愛いもんでしょう。

それに毛並みがまた普通じゃない。銀ねず色の美しい光沢と、毛氈もかくやという、そのやわらかな手触り、ぜひぜひ撫でてごらんなさい。まるでビロードのようですよ」などとお客さんを相手に自慢話に花を咲かせます。けれども、「わー、いたいー、こら、放せ、このやろうー」という死に神さんのあられもない絶叫で終わるのが常でした。

実は、この猫、ひどい噛み癖がありまして、退屈して遊んでほしくなると、思いっきり人に牙を立てるのです。私も何度か噛まれました。それはそれは痛いものです。

そういうことのあった晩は、店の二階から、死に神さんの怒鳴り声と、猫の激しいうなり声が風に乗って聞こえてきます。二人のけんかは、いつも夜遅くまで続きました。

死神の恋　2（前書き）

前回までのあらすじ

みどり濃い公園に、ぽつんと建つ、ひなびた食堂。若奥さんの舞ちゃんは、みんなの人気者。そこへぶらりと現れた、猫づれの風来坊、死に神さん。たちまち人妻の舞ちゃんに一目惚れ。やがて、食い詰めた死に神さん、舞ちゃんの食堂に、猫と一緒に転がり込んだはいいが……。

舞ちゃんと死に神、二人の淡い恋を通して、庶民の人情と、現代人の孤独を浮き彫りにする。

死神の恋　2

前回までのあらすじ

みどり濃い公園に、ぽつんと建つ、ひなびた食堂。若奥さんの舞ちゃんは、みんなの人気者。そこへぶらりと現れた、猫づれの風来坊、死に神さん。たちまち人妻の舞ちゃんに一目惚れ。やがて、食い詰めた死に神さん、舞ちゃんの食堂に、猫と一緒に転がり込んだはいいが…。

舞ちゃんと死に神、二人のの淡い恋を通して、庶民の人情と、現代人の孤独を浮き彫りにする。

『死に神の恋　2』

私が一番気に病んだ、夫と死に神さんとの関係についてお話ししなくてはなりません。

夫は人当たりが良く、小さなことにこだわらない鷹揚な性格の持ち主で、ちょっと短気な面もありますが、とても包容力のある人です。小柄で風采も上がらないのに、私がお嫁に行く気になったのも、この人ならば、いつも私を支えてくれるに違いない、と女に思わせる、性格上の美点を持っているからでした。

死に神さんの方は、ふだんは明るく振る舞っていますけれども、その実、世の不幸をすべて背負い込んだような、深い憂悶にいつも悩まされている人でした。横顔に印された、深いかげりが、何に由

来するものなのか、誰にも分からず、それが返って、あの人の謎めいた魅力となっていました。

明るくてお人好しの、いかにも小さなお店の店主然とした夫と、人生をどこか遠いところから眺めている、無頼派の死に神さんとは、趣味も性格上の一致点も皆無で、よほどのご縁がなければ、この世で出会うはずがない、と私などは思ったほどでした。

けれども、不思議なことに、二人は意外と馬が合うようでした。互いの中に自分の持っていない長所を見つけて、共に一目置いている風にも見えました。

こうして、ふたり敬意を払い合い、親しみを深くしてゆくにつれて、死に神さんは悩みました。秘め事を胸に抱いていることが辛く、どうしても胸襟を開いて夫と話すことができないからです。恩義と恋と、死に神さんは板挟みの状態でした。

それでは、私はどうかと申しますと、ひと言で言えば、とても変な気分でした。私には夫を裏切るつもりなど毛頭ございませんでした。その一方で、自分を女として評価してくださるあの方の存在が、心の深いところで、日に日に大きくなって行くのを抑えきれませんでした。仕事中、ふと目が合ったときなど、ついつい女のまなざしで見つめ返してしまい、後でひどい羞恥心と後悔に悩まされたものです。

私にとって、死に神さんの気持ちは謎でした。あれっきり、私に言い寄るわけでもなく、話しかけてさえ来ません。表面上は明るく振る舞いながら、ときおり、ふと見せるさみしげな横顔に、私は、あの方の心持ちを、あれこれと僅かに推測するだけでしたでした。

いつの間にか秋も深まり、季節は十一月。善福寺川沿いの落葉樹の森は、東西数キロにわたり、くれない、黄、緑の、すばらしい色の競演。かつて高名な作家が描いた、いにしえの武蔵野にも劣らない、見事な紅葉の季節の到来です。

秋空が目にしみるほど青い、ある日の午後、私たち親子三人は、大太鼓のいかめしく鳴り渡る、大宮八幡様の銀杏並木を、親子水入らずの喜びに包まれ、仲良く手を繋いで歩いておりました。足下では、銀杏の落ち葉が、かさこそ、かさこそと、秋らしいささやきを交わしていました。

私の左手には娘の小さなてのひら。それが柔らかく、あたたかく、とても愛しげで、母としての喜びが、ほとほとと身内からわき上がってくるのを、私は抑え切れませんでした。この子が無事七五三を迎えたことを、私たち夫婦は、神様にただただ感謝するばかりでございました。

本殿に上がると、互いの神妙な顔付きに吹き出しそうになりながら、神主様のお祈りの言葉を、三人膝を正してありがたく拝聴。続いて巫女さんの美しい舞に見ほれつつお祓いを受けると、ようやく親としての務めが終わり、ほっとしたところで、今日、この晴れの日を祝って記念撮影。

夫は、よし、ここはパパに任せよ、とばかりに大張り切りで、もっと右に寄って、そうそう、そのぐらい、いやいや、ママはそこでいい、うーむ、光線の加減がどうのこうのと、そのうるさいこと、うるさいこと、親ばかに見事なまでになりきって、まわりの方々からあたたかな笑みを頂くほど。

私と娘の方は、だんだん着物が窮屈になって参りまして、もうそ

ろそろ帰りましょうよ、うんうん、私おうちでごちそう食べたい、そら、この子もこう言っていますよ、あなたもお腹がすいた頃でしょう、そうそう、パパもお腹がすいた頃でしょう、などと言って、にわかモデルの役得を辞退しようとするのですが、夫ときたら、いやいや、まだまだ、舞だって着物姿がまんざらじゃないぜ、歌舞伎町にだってこんないい女いないよ、などと意味深長なほめ方をして、なおも快調にシャッターを押し続けています。

ところが、そのうち、夫は、はたとあることに気づき、うーむ、親子三人の写真が一枚もないじゃないか、うーむと三度ばかりうなって、それから、これはまずいと短い首をひねり、辺りをきょろきょろと見回したところ、めおと銀杏の見事な紅葉を見上げている、いかにも暇そうな方の後ろ姿が、夫の目に入りました。

これはいい、よしよし、この御仁ならめっぽう暇だろう、と思い、夫が声を掛けてみますと、なんと、それは死に神さんで、晴れの日に不吉なあだ名だな、と夫婦そろって思いつつも、シャッターを押してくださいなと頼みますと、浮かない顔にちょっと暗い笑みをつくり、しばらくぎこちない手つきでカメラをひねくり回してから、やっと構えてぱちり。

見事なピンぼけ。これは私としたことが、一体どうしたことか、いやね、私もむかしカメラに凝ったことがありましてね、そもそも写真をとるときはですね、などとうんちくを傾け始めたのを夫婦で遮り、弘法も筆の誤り、死に神だってたまには鎌を忘れますよ、ささ、もう一枚お願いします、と頼みまして、またぱちり。

今度は夫の顔が四分の一しか入っておらず、娘の姿はぼんやりとは写っているものの、まるで添え物のようで、母親の顔ばかりくっきりと鮮やかなのには、私の方がおろおろしてしまいまして、夫の

顔を盗み見ますと、うーん、うーん、また三度うなり、しみじみと、あんた、本当にへたくそだね、と言って困惑の様子。

死に神さんもひどく狼狽して、いやね、生まれてこの方ですね、カメラなどあまり手にしたことがなくてですね、などと、先ほどとはあべこべの弁明にいそがしく、そのうち、ああ、忘れてました、相棒をそこの木に繋いだままにしていましてね、ほら、奴の鳴き声が聞こえるでしょう、と言い始め、いくら耳を澄ましてもなにも聞こえないのですけれども、これを潮に、さあ、僕はそろそろ行きますよ、親子水入らず、邪魔をしてごめんなさい、と言い残して去って行きました。

帰り際、お社の裏手の森の、黄金色に染まった静かな空間を、親子三人、手を繋ぎ、橋の方へ下りて行こうとしますと、左手の、ちょうど店の方角を見下ろすベンチに、ぽつりと人影があります。死に神さんでした。悪魔君とふたり、秋を眺めていました。声を掛けようとしたのですが、先ほどのおどけた笑みはどこへやら、その横顔には憂悶のかげりがくっきりと浮かんでいて、夫婦顔を見合わせ、その場を黙って立ち去ったのでした。

「こら、すのこ、すのこ、すのこを忘れているよ」「水の出が悪いじゃないか。ポンプ。ポンプ」「早く竿をセットしてお客に渡せ」今日も義父の怒鳴り声が死に神さんに浴びせられます。死に神さんときたら、右に左におたおた、おろおろ。

それでも、何とかこの仕事で食べていこうという気構えが、目にも顔にも強く表れていて、誰一人笑う者はいませんでした。なぜこんな勤勉な人が、ここまで尾羽うち枯らしてしまったのか、それほど今の世の中は、生きて行くのにハードルが高いのか、店の者は、みな一様に同じ疑問を抱いたものでした。

死に神さんの過去は複雑でした。永年勤めた会社を早期退職した後は、軽貨物の委託受注の仕事を一時やっていたそうです。けれども、独立開業など名ばかりで、軽トラックを法外な値で買わされたあげく、実入りの方はごくごく僅か。失業者からなけなしの金を搾り取る、詐欺まがいの商法、と気づいた時にはすでに遅く、けっきょく廃業。

おかげで貯金が底をつき、後はおでんの屋台をひいてみたり、コンビニで働いてみたり、派遣会社に一時籍を置いてみたり。そのうち年収に近い月収が得られるなどといった甘い言葉にのせられて、サプリメントのネットワーク・ビジネスを始めたものの、たちまち借金をこさえて自己破産。一時はどこかの橋の袂で雨露をしのぐまで落ちぶれていたのだそうです。

その後、前の会社の後輩を拝み倒して保証人になってもらい、やっとタクシー会社に就職、この三年ばかり、どうにかこうにか食べてきたのだとか。

「早期退職するにはまだ若かったんじゃないの。何かのっぴきならぬ事情でもあったのかな」と言って、義父は履歴書を手に首をひねっておりました。

共に仕事に恵まれず、苦労を重ねたせいでしょうか、死に神さんとアルバイトの健ちゃんとは何かと気が合うようでした。健ちゃんは、専門学校を卒業後、派遣の仕事やアルバイトをしながら正社員の働き口をずっと探してきた子で、うちに来て三年、年が明ければもう二十六歳になるのに、未だに就職ができずにおります。

この頃では、夫や私に不採用の報告をするのが辛くなったのでしょうか、リクルート・スーツに身を包んで面接に行く姿も見られな

くなってしまい、将来、お嫁さんも貰わなくてはならないのに、これから一体どうするのかしらと、私もとても心配しているのです。

ある月曜の定休日、我が家のむく犬と川沿いの小道を散歩していますと、尾崎橋の西に広がる芝生広場から、冷たさを増した秋風に乗って、聞き慣れた笑い声が流れてきました。

赤く鮮やかに紅葉の進んだ桜の木の下で、四人の男の方がテーブルを囲んで宴会を開いているご様子。どうやら死に神さんと健ちゃん、それに店の常連の安蔵さんがいるようです。そして、もうひとりどこかで見たことのある方のお姿も。

健ちゃんが私に気づき、秋の陽を銀縁の眼鏡に映して手招きします。上機嫌らしく、色白の顔がもう真っ赤です。悪魔君を見つけはしゃぎ回る犬に引かれ、そばに行ってみますと、大きな焼酎のペットボトルをテーブルの真ん中に置き、百円ショップで買ってきたらしい粗末なつまみを広げて、いまや宴たけなわ、といったところでした。

いつになく快活な死に神さんが、隣に座っている六十歳前後の男性を私に紹介します。公園の公衆便所のひさしの下で、雨露をしのいでいるホームレスの方で、私も、犬の散歩の行き帰りに、段ボールの中で縮こまっているお姿を、何度かお見かけしたことがあります。

死に神さんの話によりますと、そのホームレスの方は、軽貨物のお仕事をしていたときの先輩とのことで、むかし、まだ景気のよい頃は、運送会社の社長さんだったそうです。

やがて、世間の風向きが、規制緩和の方角に向かうにつれて、運

送業界も競争が激しくなり、とうとう会社は倒産。再起を図ろうと、死に神さんと同じように、例の軽貨物の会社と委託受注の契約をしたのですが、やはり収入は僅かで、一日一食で飢えをしのぎながら、ただただ車のローンを返すだけの日々を送ったとか。

結局、重労働がたたって体を壊し、かつて二十名の社員を使っていた元社長さんも、公衆便所で雨露をしのぐまでに落ちぶれてしまったのだそうです。

死に神さんがこの方を敬愛すること並々でないご様子で、なんでも、例の軽貨物の会社から、同じ電設の卸問屋に派遣されていたらしく、会社員上がりで非力な死に神さんを尻目に、この元社長さん、百キロ近いパイプを華奢な肩にひょいと持ち上げ、全部で十本、見事にトラックへ積んで見せたそうです。

けっして世を呪わず、我が身を嘆かず、役にも立たないプライドなどかなぐり捨てて、ひたすらおのれの肉体を酷使し、必死に生きようとするその姿が、極貧の中で絶望していた当時の死に神さんには、人生の良き先輩、清貧のほまれも高い、一哲人とさえ思えたらしく、二年ほど前、公園の公衆便所でたまたまお見かけしてからは、煙草などを差し入れ、旧交を温めてきたのだとか。

そう伺って、少したれ気味の細い目の中をのぞいてみますと、いっけん冷たそうな光の中に、何か父性を感じさせる温かなものがあり、きれいに髭を剃った皺深いお顔には、人生を転落する以前の品の良さが、どこか残っているようでした。

このトイレの哲人さん、一年ぶりのお酒に上機嫌に酔いしれ、人生の後輩、死に神さんを相手に久々のお説教。そのおっしゃるには、世に身の置き所なきを嘆くなかれ、汝のいたらざるをただ嘆け、と。

おそらく、死に神さんは、個性が強すぎて、組織では生きてゆけない方なのでしょう。自己を決して曲げず、おのれのプライドを人一倍尊ぶ死に神さんの生き方は、昔のお侍さんには似つかわしくても、現代の会社組織では通用するはずもなく、転職の憂き目を見たのも、そんなところに原因があるのかもしれません。トイレの哲人さんは、それを正しく見抜き、汝のいたらざるをただ嘆け、とおっしゃったのでしょう。

やがて、皆さんいよいよ酔われて、私まで慣れないお酒をなめたおかげで真っ赤か。もう誰か歌い始めてもいい頃です。そんな風に皆で思っていますと、こういう場合、必ず歌好きの方が現れるもので、隣を見れば、安蔵さんが自慢の金歯をにたにた光らせ、携帯カラオケの準備に余念がないご様子。

この方も脱サラ失敗の経験者。今は廃品回収のお仕事で生計を立ててているとか。それにしても、良くもまあ、これだけ人生の転落者が顔をそろえたものね、と感慨深げに皆さんを眺め回していますと、安蔵さんが熱唱開始。なかなかのお声で『女の操』などうなり座は盛り上がるばかり。

曲が終わるのももどかしく、マイクを受け取った健ちゃんが、今様のアップ・テンポの曲を披露してやんやの拍手を受け、さあ、今度はあなたの番とバトン・タッチされた死に神さん、実はカラオケは一曲も歌えないことが判明しまして、面目なく、仕方なく、立ち上がって『君が代』を歌おうとするのを皆で必死に押しとどめ、師匠のトイレの哲人さんが、弟子の危難を救うべく歌い出したのが、なんと『荒城の月』でございました。皆さん、前歴が前歴ゆえ、妙にしんみりとして参りまして、今はこれまで、一同、枕を並べて切腹、と言った面持ちとなり、これはいけないと若い健ちゃんが元気

のいい曲をまた歌い、前にも増して盛り上がり始めたとき、ふと時計を見ればもう夕食の支度時。

あわてて悪魔君のそばで寝ている犬を起こして、足早に家路をたどったのですが、お日様が、様々な人生を見下ろしつつ西に傾き、間延びした赤い影を秋の野にさみしげに投げかけても、宴は尽きることのない様子で、後ろからは、またしても、トイレの哲人さんの『荒城の月』が聞こえてくるのでございました。

ああ、とうとうあの日のことをお話ししなければなりません。それはお月さまのとても青い、ある秋の夜のことでした。死に神さんに夕ご飯を運ぶため母屋の外に出ますと、森もバーベキュー広場の芝生も、淡く、青白く、はかなげな光の絨毯に覆われ、冷ややかな夜風の中で、静かな影を揺らめかせていました。

いつものように、私は、お店の勝手口を開けると、電球の薄い灯火を頼りに、狭い階段をそっと昇って行きました。お名前を何度かお呼びしたのですが、返事がなく、廊下の電気も消えたままです。留守かと思い、襖障子をそっと開けてみますと部屋の中は真っ暗。いえ、窓からは冷え冷えとした月明かりが差し込んでおりました。そのほのかな光の中に、あぐらを組んで夜空を見上げている、あの方の黒い影がありました。

「舞さんですか。電気は点けないでください」
「どうしてよ」
「月見をしているんです」
「まあ、ひとりでお月見」
「いえ、こいつも一緒です」

夕食のお盆を月明かりに染まったちゃぶ台の上に置き、あの方の

膝の上をのぞき込みますと、悪魔君が主人のあぐらの上で、自分もゆったりとあぐらをかき、自然の神秘の光を、ドングリ眼で不思議そうに見上げています。

「あなたも座りませんか」

ロマンティックな月の魔術に操られたかのように、私は黙って死に神さんの隣に座りました。なぜ、そうしたのかと、人は過去をふり返って自分に問いかけることがよくあります。けれどもそこに答えなどありはしません。それが、とても自然に思われた、としか言いようがないのですから。

胸の動悸も穏やかで、私は不安もおそれも感じておりませんでした。ただ、虚空に懸かる冷たい光に、じっと見入っていました。そして、何かを待っていました。

「月は、太陽の分身みたいだと、舞さん、思いませんか」

「どういう意味」

「神様がこの世を創ったとき、もともと二つの天体は一つだった。けれども、そのうち世界は二つに分かれてしまった。たとえば、陰と陽、静と動、明と暗、寒と暖という風に。そして、天空も、昼と夜とに分かれ、やむなく天体も分裂し、太陽と月になった」

「でも、なぜ世界は二つに分かれたの」

「さあ、たぶん、神様が、人間を創ってしまったからでしょう。神の意に反し、人間は世界を男性的なものと女性的なものとに分けて認識するようになった。だから、この世はすべて二つに分裂してしまったのです。いわば、神の失策です」

「諸悪の根元は、やはり人間ね」

「ええ。そして、二つに分裂した諸物は、反発しあいながらも、互いに相手を求め合うようになった」

「まるで、男と女みたい」

「そうです。あらゆる事物には、男女の法則が適合できる。だか

ら、太陽と月も、ふたたび一緒になるべく、天空で、永遠に相手を追いかけるようになったわけです」
「失われた分身を求めて」
「そう、まるで、われわれ人間のように」
「あなたの分身は、どんな人なの」
「とても明るくて、幸せそうで、いや、事実幸せで、すべての人を照らします」
「そんな幸せ一杯の人、いないと思うわ。みな何かを抱えて必死に生きてる。幸も不幸も知っている。私はそう思う」
「そうですね、誰しも明と暗とが、ある程度混じり合っている。ところが、僕と来たら、生まれてからこの方、暗い部分しか、自分を知らない」
「ふーん、分身を求める理由が、他の人よりも切実なわけだ」
「舞さん…」
「えっ」
「ごめんなさい」

次の瞬間、私はたくましい腕の中に抱き寄せられ、唇を奪われていました。陶酔と、怒りと、不安と、そして、悲しみと、様々な感情が一時に訪れ、大海の渦のように激しくぶつかり合い、混じり合って行きました。

どこかで私のちっぽけな人生が崩れ去って行く音がしました。夫の面影が強い感情を伴って脳裏をよぎると、次に娘の姿が見え、やがて深い悲嘆が私を襲いました。すべてを奪われる、私は宇宙の果てに放逐され、永遠の中をさまよい続けるのに違いない、そんな、とてつもない恐怖に、私は囚われていたのです。

「わあ、痛い、このやろうー」
悪魔君の仕業です。おとなの会話に飽き飽きした悪魔君が、主人

の向こう脛にがぶりと食らいついたのでした。その隙に、私は死に神さんの体を思いっきり突き飛ばし、階下へと逃れました。

そして、母屋の前まで来たとき、涙が止めどなく流れて、月影に染まった頬を、ほとほとと青く濡らしました。私はいま起きたことを夫に言うべきでしょうか。いえ、言うべきなのでしょう。けれども、何かの感情が、そうすることを遮っていました。もしかしたら、それは愛情だったのかも知れません。でも、私はそれを決して認めようとはせず、これから先どうしたらいいのかしらと、ただ思い惑うばかりでございました。

「どうした」突然、ドアが開き、夫が怪訝そうに声を掛けました。

「なぜ中に入らない」

「月を、見てたのよ」

「ほう、月を見ると泣きべそをかくのか」と、夫がおもしろそうにからかいます。

私は泣き笑いになって夫の体を押しのけ、洗面所へ顔を洗いに行きました。そして、少しびくびくしながら、家族三人の食卓を囲みました。でも、どうしても目を上げられません。そんな私を見て、夫がぞっとするようなことを言いました。

「お前、あいつと何かあったな」

「何かとは…、なに」それこそ蚊の鳴くような声で私はそう問い返しました。

「あいつがお前に気があることぐらい、以前から知っていたよ。だがな、おれはお前を信じてるし、なにも言わないよ」

私は、夫の気持ちが嬉しいというよりも、むしろ辛くて、どうしてもその優しい目を見返すことができませんでした。隣では、娘が、不思議そうに両親を見つめております。私は、その小さな頭を、た

だ無心で撫でるばかりでした。

やがて、我が子に対する熱い愛情が、胸一杯にこみ上げてきて、ひとりの女ではなく、母親としての自分が甦ってくるのを、私は強く感じました。

「どうしよう、出て行って貰おうか」そう呟いてから、私ははっとして夫の顔色を窺いました。

「それはむごい。あいつ、路頭に迷うよ。それに、いつまでもいる訳じゃない。一年だけだ。お前さえしっかりしていれば、問題はないよ」

その夜、夫婦は本当に心からうち解けて、娘を真ん中に、いつまでもいつまでも寝物語を続けたのでした

3（前書き）

みどり濃い公園に建つ、ひなびた食堂。そこに転がり込んだ、猫づれの風来坊、死に神さん。若奥さんの舞ちゃんに、柄にもなく恋わずらい。やがて、大胆不敵な作戦に出た死に神さん、舞ちゃんに、ものの見事にひじ鉄砲を食らい…。

若妻、舞さんと、死に体の物書き、死に神さん、ふたりの淡い恋を通して、庶民の人情と、現代人の孤独を浮き彫りにする。

3

死に神の恋　3

前回までのあらすじ

みどり濃い公園に建つ、ひなびた食堂。そこに転がり込んだ、猫づれの風来坊、死に神さん。若奥さんの舞ちゃんに、柄にもなく恋わずらい。やがて、大胆不敵な作戦に出た死に神さん、舞ちゃんに、ものの見事にひじ鉄砲を食らい…。

若妻、舞さんと、死に体の物書き、死に神さん、ふたりの淡い恋を通して、庶民の人情と、現代人の孤独を浮き彫りにする。

死に神の恋　3

次の日から、私は、いっさい、あの方と言葉を交わさないことに決め、夕食も店の一階にそれとなく置いておくだけで、絶対に二階へは運びませんでした。日曜日が来て店に出ても、仕事上の会話以外は口をきこうとせずに、ひたすら無視し続けました。

このようなとき、女ほど残酷な動物はありません。色恋で、こうと決めたら、テコでも動かないのが女です。百年の恋を誓ったお方が情を求めてまいりましても、状況が変わり、そこから心境の変化が生ずれば、過去を完全に切り離して、新しい自分でいられるものなのです。

ところが、死に神さんには、その非情の法則が働かなくて、私はとてもあわてました。何しろ、あの方ときたら、ただただ、ぼうっとして、魂がどこか遠い世界へ行ってしまったようで、仕事など当然手につかずに、いよいよぼうっとして、義父に怒鳴られてばかり。

おまけに、お客さんのオーダーをたびたび間違えて、食堂の義母にまで小言をしじゅう頂き、それでも、ふぬけたように口を開けて、日がな一日ただぼうっとしているのです。

色恋において、蛇のように冷酷になれるのが、女でありましても、母性ゆえに、仏様のように情け深いのも、また女というものです。なにかと私たちを利用しようとする殿方が、世間にたくさんいらっしゃるのも、ひとえに、私ども女が、母性という、生来の弱点を持っているためと言えるでしょう。

一方、母性に訴え難局を打開する気など、死に神さんの方には、まったくありませんでした。ただただ、ふぬけたように、ぼうっとしていただけでございます。そして、ひどいミスを重ねるたびに、私をやきもきさせて、女心を微妙にくすぐるのでした。

死に神さんには、何かと深く思い詰める性癖があるようでした。他の人からみれば些細な悩みでも、それが、心に刺さった鋭いとげとなり、あの方をいつまでも苦しめ続けるのでした。

社交的な方ならば、誰かに悩みを聞いて貰うことで、気晴らしもできますし、適切なアドバイスだって受けられるでしょう。けれども、死に神さんは、悩み事があっても、口を真一文字に結んで、一人でぐっとこらえてしまい、ストレスのはけ口を探そうとしません。ですから、不安定な精神状態が、人よりも長く続く傾向があるようでした。

義父も、「本当に変わり者だね。最近じゃ、猫としか話をしないよ」などとぼやきつつ呆れ顔です。

義父の言うとおり、その頃、死に神さんの心のよりどころは、相棒の悪魔君だけでした。赤いセーターなど着せて、朝夕散歩に連れ出し、冬木立のベンチから、移ろい行く季節を、二人でしんみりと眺めているのでした。

悪魔君はやはり賢い猫です。主人が落ち込んでいるのが分かるらしく、ひたすら、すりすりと甘えて、時には、お腹を出して、ごろごろしておどけて、一生懸命死に神さんのほほえみを引きだそうとします。

ある北風の舞うとても寒い日のこと、川沿いの道を、いつものように犬を連れて散策しておりますと、冬枯れた林の中に、誰かの視線をそれとなく感じて、私はほこりっぽい砂利道に、ふと足を止めました。公衆便所のひさしの下から、トイレの哲人さんが、にこやかに手を振っています。

「お嬢さん、久しぶりだね」優しそうな笑顔でお世辞まじりにそう言われると、ついつい雑談に引き込まれしまい、ちょうどいい機会なので、私は、哲人さんに、死に神さんのことをあれこれと尋ねてみました。

「ああ、時々来るよ。最近、元気ないね。まあ、こんなべっぴんがそばにいたんじゃ、何となく原因も分かるけどね」としわがれた声で言って、トイレの哲人さんはおかしそうに笑いました。

「困るわ。わたし子持ちの人妻よ。そりゃあ、あの人に人間的な興味はあるけれど、男と女としてではないわ」

「いや、むろん、あいつの岡惚れではあるがな。ただ、あいつは、単純に男女の関係になりたい訳じゃないと思うよ」
「じゃあ、何を望んでいるの」
「あいつは自分に欠けているものを、あんたの中に発見したんじゃないかな」
「欠けているものって、なに」
「さあね。でも、それが何か、奴はそのうち答えを見つけるだろうよ」

やがて、暮れも押し迫り、世間が何かとあわただしくなっても、死に神さんは相変わらず元気がなく、夫もちょっと心配そうでした。何くれとなく、親しげに話しかけて、夫も気を引き立てようとするのですが、死に神さんは恐縮そうに縮こまるばかりで、なかなか夫の目をまっすぐに見ることができません。そんな二人の姿を見るにつけ、自分まで、何だか悪事の共犯者のように思えてきて、私は少し悲しくなってしまいました。

そして、正月。川向こうの大宮八幡様は、初詣の参詣客で大変な賑わいです。そのためうちの店もとても忙しく、正月のごちそうをみなで頂いたのは、三日の夜になってからでした。かたかたと、寒そうな風が窓ガラスを叩く中、家族一同、店のだるまストーブの前に集まり、温かなお雑煮を頂くのも、ほのぼのとした味わいのあるものです。

死に神さんはと言えば、健ちゃんの後ろに隠れるようにして、何年ぶりかで食べるというお雑煮と、真剣な面持ちで向き合っています。足下では、悪魔君がおせちのお相伴にあずかり、蒲鉾などをおいしそうに頬張っていました。

「あんたさ、いつまでも独りじゃ、世間体が悪くないかい」義母が死に神さんの顔色を窺いながら、母親めいた口調で切り出しました。「知り合いに図書館で働いている女の人がいてね、なかなか美人なんだけど、勤め先が地味なせいか、ご縁がなくてね。年の頃もお似合いだし、あんたにどうかと思ってね」

お椀の中の箸を休め、死に神さんを見ますと、あの方は、伸びた餅をくわえたまま、大きな目を丸くし、それから、口の中の物を急いで咀嚼して、詰まるのも構わずぐっとのみ込んで、それで真っ赤になって、一分後に、やっと、「はあ」と生返事をしました。

「それはいい。身を固めれば、これまでみたいな無軌道な生き方も自然とできなくなる。男には女房という重しが必要なのさ。押さえ付けるものがないと、とんでもない方向にすっ飛んで行っちゃうのが男の子ってもんだ」と義父もこれは名案、とばかりに大きく頷いています。

口々にみなが死に神さんにお見合いを勧める中、私だけは、ひとり黙りこくってお箸を動かしていました。

そのうち、義母が手提げからお見合い写真を取り出し、みなに見せ始めました。回されてきたその写真を手にしてみれば、年を感じさせない和服姿の美人が、目もとも涼しげに微笑んでいます。濡れたような赤い唇と、襟元から覗く細いうなじが、とてもあだっぽく艶やかで、それでいながら、小首をかしげ、こちらを見つめるその姿態には、どこか娘のような清らかさが漂っていました。

「舞さん、どうしたんですか。むすっとして」健ちゃんが不機嫌

そうな私の顔を見つけて、おかしそうに言いました。

二週間後の月曜日、きょうはいよいよお見合いの日です。北風の吹き募る寒い午後、死に神さんは、糊目の定かでない、夫の一張羅の背広を着込み、母屋の義父母のもとに現れました。義母の着付けを手伝っていた私が玄関を覗いてみますと、下駄箱の上に掛けられた丸い鏡に向かって、硬直をした顔面の筋肉を、一生懸命動かしていました。

「なにしてるのよ」

振り向いたその顔には、まるで彫像が無理やり笑ったような、奇妙な笑みがこびり付いていました。笑顔の練習中だったのでしょう。むき出しの白い歯がそれを物語っています。

ようやく、長い支度を終えて義母が出てきますと、死に神さんは、小粋な着物姿の義母の後を、まるで奴さんのようにかちかちになってついて行きました。

そして、三時間後、やはり、奴さんのように、かちかちになって戻って参りました。冬木立の奥にその姿を見つけ、先に戻った義母と私が出迎えますと、「ただいま戻りました。振られました。お気遣い、ありがとうございました」とだけ言って、特にがっかりした風もなく、店の二階へさっさと昇って行きました。

先方様から後に聞いたところに拠りますと、義母たちが帰った途端、死に神さん、黙りこくってしまい、２０分ほどじっと喫茶店の外を眺め続けて、何を思ったのか、おもむろに通行人の品評を始め、ほら、猿が背広を着たような、あの中年の紳士をごらんなさい、額

に皺が三本あるでしょう、実はね、僕のね、昔の上司にそっくりでしてね、あれはけちですよ、皺が三本あるのは良くない、人が悪い、あっ、あっちから鬼のような顔をした巨漢の男が来るでしょう、あれは細かいですよ、おまけにかんしゃく持ちだ、上役になったらねちねちと女みたいに下をいじめるタイプですね、大男に限ってそんなのが多い、あっ、あっ、ちょっと、ちょっと、見てください、きれいな女性が向こうから来ますよ、まるで何とかというアイドルみたいだ、でもね、ああいう女性には気を付けた方がいいですよ、清純派はだめだ、罪のない顔をした女性ほど罪を重ねているものです、意地が悪いんですよ、と、ここまで言って、自分のお見合いの相手もそんな顔をしていることに気づき、あわててまた沈黙に撤退し、と思ったら、急に真剣な面持ちで何か言い出そうとして、こっちが何事かと思い身を乗り出したら、やっぱり止めて、じっと先方の女性の顔を見つめ、それにも飽きたのか、ケーキをおいしそうに平らげ、そのまま店を出たのだそうでございます。コーヒー代は払い忘れたようです。

義母もさすがに怒り、私の顔をつぶした、最初から乗り気でなかったのか、となじったのですが、死に神さん曰く、決してそんなことはない、まじめにお見合いをするつもりだったし、良い感じの人だとも思った、けれども、対座しているうちに、どうしてもある人と比べてしまい、お見合いどころでなくなったのだ。

「何よ、つまり惚れた女がいるのね。誰よ。まさか、私の知っている人じゃないでしょうね」

死に神さんも、そばにいた私もぎくりとして、思わず、互いの顔を見てしまいました。女の勘はやはり鋭く、義母の追求はやみません。

「どういうことよ。ひょっとして、うちの嫁にでも懸想しているの」と、義母が古風な言い回しで詰め寄りますと、死に神さん、心底から困惑して、猫が呟いたような、不明瞭な言葉で、もごもごと何か言っています。

その場は義父と夫が取りなし、うやむやになったのですが、それからというもの、あの方、いよいよ無口になり、また、ほかの者も冗談一つ言わなくなって、みなが私とあの人にそれとなく注意を払っているような気もして、店全体がとても息苦しいムードになってしまいました。

店の人たちに囲まれていながら、死に神さんは、ひとりぼっちでした。せっかく私たちという新しい家族を得たのに、それをあっという間に失い、無性に居心地の悪い空間に、毎日ただ黙りこくって存在しているだけでした。

その頃、死に神さんは、暇さえあれば悪魔君と冬ざれの公園を歩き回り、時に、林の中のベンチにぽつんと座って、じっと何かを考えていました。ひとりで自分の思いを見つめるその横顔には、救いようのないほど深い、孤独の色が印されておりました。

ある日の昼下がり、冬日が侘びしげに影を落とす木楢の林で、犬の頭を撫でながら、ベンチでひとりやるせなくもの思いにふけっていますと、かさこそ、かさこそと、枯れ葉を踏みしだく静かな足音がして、私は、ふと、ふり返りました。

黒いロングコートを着た男の人が、やわらかな目で私をじっと見

下ろしています。死に神さんでした。私が微笑むと丁寧にお辞儀を返して、それから、少しばつが悪そうに、なおもそこに立っています。

私が人目を気にして、立ち上がろうとしますと、悪魔君があの方の手を放れ、膝の上にちょこんと乗ってきました。浮かせた腰をもう一度落ち着けて、見事なグレイの光沢を、ついつい撫でていますと、猫のリードを手繰って、いつのまにか死に神さんが隣に座っていました。

遊び相手の出現に喜んで、足下では、うちのむく犬が激しく尾を振り、それがおもしろくて、今度は悪魔君がその太い尾に、しきりとちょっかいを出します。

やがて、その場のほのぼのとした雰囲気が、ふたりの間に横たわる感情の溝を自然に埋めて、私たちは、本当に久しぶりに、微笑み合ったのでした。

冬の木漏れ日の中、北風のささやきに耳を傾け、ふたり交わす言葉と言えば、とりとめもなく意味もなく、いつしか、それさえも、冬木立の静寂のうちに絶え、ただ頭上には、連れあいを捜す鳥たちの、さみしい鳴き声だけが、高く高く響き渡っていました。

いつか、温もりを身近に感じて、ふと耳元の息づかいに聞き入るとき、情愛の言葉の数々が、まるで泡のように、浮かんでは消え、消えては浮かび、やがて、はにかみを含んだ私の笑みを、ひそやかに誘います。

口づけは罪の味がしました。喜びはなく、ただ、この世にある悲しみが、人に生まれてきた苦しみが、私の心を強く強く締め付けて

いました。私は泣きました。あの人の腕の中で、幼子のように泣き続けました。

「一緒に逃げよう」

ぞっとして我に返り、私は男の胸を押しのけ立ち上がりました。

「無理よ。子供がかわいそう」

「一緒に連れて行けばいい」

「なにを言っているのよ。子供には幸せな家庭が必要なのよ」

「その幸せな家庭とやらを、僕と築けばいい」

「あなたにそんな経済力があるの。子供を育てるのに、これから先、どれだけお金が必要だか、あなた、考えたことがある」

私は言いすぎたのでしょうか。二人の間に、不自然で、ひどく気まずい沈黙が流れ、その静寂の底に、口づけの余韻だけが空しく漂っていました。

その時、私は確かに母親でした。決して、か弱い女などではなく、子供のためなら命をも投げ出せる、母親という名の別種の生き物だったのです。

やがて、冬の日がつかの間の温もりを失い、再び北風が立つと、寒々とゆれる林の上枝から、烏が悲しげに一声鳴きました。二人は侘びしくなりました。二人はさみしくなりました。あの人は、自らの運命を、呪うように言いました。

「恋ほど不条理なものはない。今生では、決して結ばれない定めでも、気持ちの方は勝手に前へ前へと突き進んで行く。現実の厚い壁に跳ね返されても、何度でも突き進んで行く。僕は、その行為を

尊いと思う。破滅を求めるかのような、その行為を、僕は、とても尊いと思う」

私は、死に神さんの言葉に、何か暗い予感がして、急に怖くなりました。私は、あの方の陰気な横顔を、不安な目でじっと見つめました。けれども、そこには、深い沈黙が、謎のようにこびり付いているだけでした。

「なぜ、私のことを、そんなに想うの」私は言いました。
「よく分からない」
「私に何を求めているの」
「分からないんだ」
「世間には、あなたに似つかわしい人が、いくらでもいるでしょう」

激しい目で私を見上げ、あの方は、低く震える声で答えました。
「僕は、単純に、一つの恋を成就させようとしているのではなく、あなたに、他の人とは違う、何かを見いだし、それを手に入れたいと願っているのです。だから、他の人では、どうしてもだめなんです」

すでに、二人の足下には夕影が赤く忍び寄り、頭上からは、ねぐらに戻る鳥たちの、悲しい鳴き声が、しんしんと降りてきていました。

私は闇を恐れました。恐れて、急に駆け出しました。駆けながら、あたたかな我が家が恋しくてなりませんでした。夫と娘が恋しくてなりませんでした。白い息を切らし走り続ける私を、何も知らない犬が、無邪気に追い越して行きました。

死に神の恋　４（前書き）

みどり濃い公園にぽつんと建つ、ひなびた食堂。そこに転がり込んだ、猫づれの風来坊、死に神さん。店の若奥さん、舞ちゃんにひそかに横恋慕。

やがて、秘めた想いを人々に見抜かれた死に神さん、ひたすら居心地悪くて、悶々とした日々を送る。それが可哀想で、やきもきする舞さん。いつのまにか、微妙に、よろめき始め……。

若妻、舞さんと、死に体の物書き、死に神さん、ふたりの淡い恋を通して、庶民の人情と現代人の孤独を浮き彫りにする。

死に神の恋　４

死に神の恋　４
前回までのあらすじ

みどり濃い公園にぽつんと建つ、ひなびた食堂。そこに転がり込んだ、猫づれの風来坊、死に神さん。店の若奥さん、舞ちゃんにひそかに横恋慕。

やがて、秘めた想いを人々に見抜かれた死に神さん、ひたすら居心地悪くて、悶々とした日々を送る。それが可哀想で、やきもきする舞さん。いつのまにか、微妙に、よろめき始め…。

若妻、舞さんと、死に体の物書き、死に神さん、ふたりの淡い恋を通して、庶民の人情と現代人の孤独を浮き彫りにする。

死に神の恋　４

桃の節句。晴れ着姿の娘は、おひな様よりも美しく、梅の花よりもかぐわしく、夫と私と、親ばか二人を、心底ほれぼれとさせ、幸せにします。あられをつまむ小さな手の愛らしいこと、襟首から覗く、細いうなじの女めかしいこと。夫と二人、幾度も幾度もシャッターを押しながら、私は母としての喜びを、存分に味わっていました。

もうひと月近く、私は、あれこれと理由を付けて、店に出ていませんでした。死に神さんとも、あれっきり顔を合わせていません。あの冬の日の過ちが、遠い思い出となることを願いながら、母として、妻として、私は自分の役割に、忠実に生きていました。

私が店に出たがらない理由を、夫は、もちろん気づいていました。ですから、仕事がどんなに忙しくても、しかられたことはありませんし、愚痴を聞いたこともありません。夫は、ただ黙って私を見守っていてくれました。心から私を愛し、そして、信じていました。

けれども、夫に愛されれば愛されるほど、私は、心が辛くなって、とても自分が惨めに思えました。私は、不貞の妻であり、この世に身の置き所のない存在なのです。私はあの方を憎みました。家族の平和を脅かす、あの方を、本当に憎いと思いました。

夫はあの人のことをどう思っているのでしょうか。私にとって、仮にそれが夫であっても、男の人の心は謎です。夫の関心の対象と言えば、私と娘と、それに店の経営だけのようでした。

でも、本当は、その頃、夫はとても苦しんでいたのではないでしょうか。醜い疑心に囚われる一方で、妻を信じようとしない自分を深く恥じ、一人で、悶々としていたのではないでしょうか。男の人特有の見栄と申しますか、嫉妬することを極度に嫌い、一人でずっと悩み続けていたのに違いありません。

夫は、表向きは何事もないかのように、死に神さんと接していました。けれども、以前のように、腹蔵なく話し合うことは、さすがにできなくなり、あの人をどう扱って良いものか、日頃、かなり戸惑っているようでした。

夫にとって、あの人は、恩を仇で返しかねない、危険な人物であり、その一方で、父の友人から預かった、あだおろそかにできない存在であり、また、陰ひなたなく働く、とても勤勉な使用人でもあるのです。

そのような不自然な関係が煩わしくて、二人は互いに精神的なストレスをため込んでいたようです。お陰で、店の空気は、いよいよ緊張を孕んだ、とげとげしいものになって行きました。

やがて、例年より早い春を迎えて、東西三キロに及ぶ善福寺川の遊歩道は、競い咲く桜の花々で、水影までピンクに、美しく埋め尽くされて行きました。

花見客たちは、この桜の隧道を、感嘆の声を発しつつくぐり抜け、やがて遊歩道の尽きる辺り、青葉ゆれる木立の中に、木造のひなびた食堂を見つけて、ふと喉の渇きをいやそうと思い立つのでした。

連日、客が引きも切らない店の中で、私は再び元気良く働き始めました。お運びで大わらわの最中に、裏の売店から、お菓子を買い求める子供たちの声が聞こえて来ます。お盆を投げ出し、急いで駆けつけると、今度は外テーブルに団体さんが腰をかけ始め、ラーメン、カレーの大量注文。あわてて中に戻ってみれば、注文を間違えたのか、夫と義母が盛んに言い合っており、かたわらでは、皿洗いのおばさんが、山のような洗い物を前に、ヒステリーの発作を起こしている有様。本当に、毎日が嵐のようです。

釣り場を担当している死に神さんも、竿の仕掛けから、ポンプの操作、それに釣り客への出前まで、毎日汗まみれになってこなしていました。でも、まだまだ不慣れなこともあり、竿やお盆を片手にうろうろするばかりで、なかなか仕事が前に進まないようでした。

とは言うものの、何よりも仕事を尊び、日々身を粉にして働く姿を目にして、店の者たちは、再びあの方に、好意とほのかな尊敬の念を抱くようになって行ったのです。

ああ、私は、一体、どうなってしまったのでしょうか。なぜ、あんな恐ろしいことを言ったのでしょうか。私は、自分という人間が分からなくなってしまいました。

それは、桜の花がちらほらと夜風に舞う、しんみりとした晩のことでした。店のガラス戸をそっと開けて、死に神さんのために、遅い夕食をテーブルの上に置いた時、背後に、突然、人の気配を感じて、私はぎくりとしてふり返りました。

死に神さんでした。買い物袋をぶら下げ、ばつが悪そうに戸口に立っています。私を見て微笑もうとしましたが、目は少しも笑っておらず、何かの感情を押し隠したような、妙に硬い表情をしていました。

軽く挨拶を返し、急いでその脇をすり抜けようとしたとき、ガラス戸が、ぴしゃりと、目の前で閉じられました。

「何するのよ」

思わず口をついて出た言葉に、こちらのおそれを感じ取ったらしく、あの人は、努めて表情を柔らかくし、私を見つめ続けました。

「どいてよ」

その言葉が終わる前に、私は抱き寄せられて、再び唇を奪われていました。私はもがきました。けれどもしょせん無駄でした。なぜならば、どこかで、私は、この瞬間を待ち望んでいたからです。

全身の力が抜けて行きました。なぜか夫の面影は思い浮かびませんでした。ただ、恋ほど不条理なものはない、と言った、あの人の言葉だけが、頭の中をぐるぐると駆けめぐっていました。

やがて、罪深い恍惚の中で、私は、あの人の意外な言葉を聞きました。

「僕は、ここを出ます」

突然、やるせなさが潮のように心に満ちて来て、私は、涙声で言いました。

「いやよ。そばにいてよ。今さら、ひどい」

「僕は、どこに行っても周りの人を不愉快にさせる。この世のどこにも、僕の居場所はない。僕には、何かが欠けているようだ。こんな人間は、この世にいること自体が間違いだ」

「何でそんなことを言うの。この世にいてはいけない人なんて、いやしないわ」

「あなたは完全に普通の人だ。いい意味でね。だから、僕のことは分からない」

「連れて行ってよ。ねえ、一緒に逃げようって言ったじゃない」

あの方の胸に顔を埋めながら、私は言いました。

清楚で貞淑な妻、子育てに夢中の平凡な母親、すべて嘘でした。すべて虚構でした。私は、この世に生まれてから今に至るまで、ひとりの女だったのです。

あの方は、力無く微笑むと、私の耳元で、そっと言いました。「どこへ逃げても、何かが、僕を追い掛けてくる。どこに隠れても、そいつは、たちまち僕を見つけ、真っ黒な虚無へ引き戻そうとする。

だから、生きている限り、僕は人々から切り離されている」

「私が守ってあげる。あなたに、生きる喜びを、教えてあげる」

「無理さ。僕は、とても疲れている」

私は暗い予感に囚われ、ぞっとしてあの人を見ました。少し伏せたその目には、あきらめとも、悲しみともつかない、暗澹とした光が宿っていました。

「私と別れることが、悲しくないの」

「悲しいさ。けれども、僕は、君を、君の家族を、不幸にしたくない」

魂が消え入るような、か細い声で、私は尋ねました。「たった一人で、一体、どこへ行く気なの」

死に神さんは何も答えずに、ただ、私を強く強く抱きしめ、愛しげに頬を寄せました。悲しげに頬を寄せました。そして、やるせなく吐息を吐きました。

母屋の方から娘の声が消え消えに聞こえてきます。夕食を目の前にして、お腹をすかせているのでしょう。

「ねえ、結論を急がないで。どうせ行くところなんか、どこにもないんでしょう」

「ああ、そうだね…」

花かおる風が、ほとほとと、悲しげに戸を叩く、春の夜のことでございました。

それから、桜の時季が、花冷えの雨とともに、足早に人々の前を

通り過ぎると、緑色の風がまぶしい五月が訪れ、店は再び目の回るような忙しさに包まれて行きました。

連休のかき入れ時、毎日ひたすら仕事に追われて、死に神さんとは、互いの目色を密かに探り合うことはあっても、言葉を交わすことはあまりありませんでした。

それでも、いつかの切ない記憶が、しっとりと胸によみがえる度に、私は、ほうとやるせなく吐息を吐き、濡れ色の目で、窓の外の緑を、漫然と眺めるのでした。私は恋をしているようでした。

死に神さんも、仕事の合間に、うつろな目であらぬところを見つめていて、よく義父から叱られていました。あの人の心は、明らかに何かに囚われています。

けれども、それは恋に心奪われた人の眼差しとは思えませんでした。いつの頃からか、あの方の瞳に宿った暗い光が、この日頃、さらに光度を増していたからです。

ある日、犬の散歩を口実に家を出て、川沿いのベンチで、一人ぼんやりと自分の心の内側を眺めていますと、突然、お嬢、久しぶりだね、と背後で聞き覚えのある声がしました。

白いTシャツを着た、白髪交じりの男の人が、目もないくらいにこにこして、初夏の木漏れ日の中に立っています。トイレの哲人さんでした。穏やかなその笑みが、自分の父親を思い出させて、私をひどく安心させました。

涼しげにそよぐ木楢の下で、二人は、ベンチに並んで腰を掛け、

まるで父娘のように、あれこれと親しく語り合いました。

いつしか、よもやま話の狭間に、ほのかな想いが自然とにじみ出てきて、私は、罪におののく胸の裡を、哲人さんに、ぽつりぽつりと話し始めました。

罪悪感に打ち震える私の声が、次第次第に細くなり、やがて、鳥たちの、朗らかなさえずりのうちに絶えるとき、トイレの哲人さんは、年輪に押しつぶされた、しわがれ声でこう言いました。

「あんたは、マリア観音みたいだね。それも、マグダラのマリアだ」

「どういう意味」

「女であることを、苦しみながら生きている。女に生まれたことを、後悔しながら生きている。そのくせ、あんたの女らしさが、殺伐としたこの世を、美しく照らしている」

「あの人が、私でなくてはだめだと言ったのは、私が、みなを照らしているからなの」

「そうだ。損な役回りだね。お天道様みたいに、みなを一生懸命照らしていなければならないのだから」

トイレの哲人さんは、流れに小石を一つ投げると、その波紋を暗く見つめて、さらに語りました。

「人間はみな影の部分を持っている。人間性の暗部、と言ってもいい。しかし、可哀想なことに、あいつは、その影を、人より多く持っている。今では、魂そのものが、暗い影にのみ込まれそうになっている。だから、あいつは照らしてほしいんだよ。あんたに明るく照らして貰って、この世に戻る道筋を、見つけたいのさ」

「あの人を苦しめているものって、いったい何なの」
「あんたに言っても分からないよ。人生からスピン・アウトしてみないと、見えてこないものも、この世にはあるのさ」
トイレの哲人さんはそう言うと、日焼けした顔に少しさみしそうな笑みを浮かべました。

六月、陰気な雨がしとしとと降る夜、台所で夕ご飯の支度をしていますと、夫が夕刊を眺めながら、突然、ぼそりと言いました。
「あいつ、辞めるってさ」

私は、台所仕事の手を休め、素知らぬ風に問い返しました。「あいつって誰のこと」
「死に神さんだよ。今月中に後任を探してくれとさ。来月には引き払うそうだ」
「辞めてどうするのかしら」
「知らない。行く当てもないだろうし、おれも親父も止めたんだが、気持ちは変わらないって」

なんて言うことでしょう。来月までもう二週間ほどしかありません。急に相談もなく去って行こうとするなんて、ひどい、あんまりです。私は、あの人を、恨めしいと思いました。口説くだけ口説いておいて、何も言わずに旅立とうとするあの人を、本当に憎いと思いました。

私は惨めでした。私は哀れでした。私はなんて馬鹿な女なのでしょう。夫以外の男性に、つかの間にでも、心を許してしまうとは。きっと罰が当たったのでしょう。
私は一晩中自分を嫌悪し責め続けました。その夜は、口惜しくて

とても眠ることなどできませんでした。

そして、七月。一生忘れられない日がやってきました。あの日は嵐でした。日本を大型台風が襲い、南から、次第に濃い雨雲が北上して来ていました。

木々の梢が、強まる風に撓り、びゅうびゅうと不気味な鳴き声を上げていました。雨脚が繁くなるにつれ、ふだんは聞こえない善福寺川の川音が、森を抜けて、私たちの店にまで迫ってきていました。

元々この辺は湿地帯で、護岸工事がされる以前は、善福寺川が氾濫するたびに、水が今のバーベキュー広場の辺りまで押し寄せて、付近一帯を水浸しにたそうです。調整地ができた現在でも、水はけがとても悪くて、数年前の集中豪雨の時などは、店が床下まで浸り、釣り堀の大事な魚たちが、あふれかえった水に押し流されてしまったほどです。

生活手段を失うのは辛いことです。ですから、その日は、早朝から店の者総出で砂袋を積んだり、池をネットで覆ったり、厳重に戸締まりをしたり、嵐に備えてみな忙しく立ち働きました。強まる雨の中、誰の顔も一様に不安そうでした。

釣り場担当の死に神さんも、ゴム製の雨合羽の下に大汗をかきながら、後任の安蔵さんと一緒に、顔を真っ赤にして重い砂袋を担いでいました。

この時まで、あの人に変わったところは特に見られませんでした。ただ、最近眠られないらしく、顔色がひどく冴えない上、体の動きも、いつものきびきびとしたものではありませんでした。

昼過ぎ、作業がようやく終わり、店の者は、みな疲れ切った様子で、驟雨の中を引き上げて行きました。健ちゃんと安蔵さんは昼食をとるために義父の棟に向かい、死に神さんは、汗を流しに釣り場に併設されたシャワー室に入ったようです。私も、お昼ご飯の用意のために、夫と共に一旦母屋へ戻ることにしました。

午後二時頃、遅い昼食を死に神さんに届けに行ったときのことです。いつものように、テーブルの上にお盆を置くと、私は二階に声をかけ店を出ようとしました。

けれども、例の少し間延びした返事が返ってきません。私は気になり、もう一度、薄暗い階段に向かって、あの方の名を呼びました。

やはり返事はありません。聞こえてくる物音と言えば、トタン屋根を叩く太い雨音と、耳鳴りのようにとどろく、水量を増した善福寺川の川音だけでした。

私は心配になりました。今では、顔を見ても口もきかないのに、顔を見るのもいやなのに、心配で仕方がありませんでした。

みし、みし、悲しげにきしむ階段を、私は、何かを怖れ、何かを期待しながら、ゆっくりと昇って行きました。そして、暗い廊下にたたずみ、襖障子の引き戸にそっと手をかけました。私は、自分の手がかすかに震えていることに気づきました。それでも、無意識の深い感情に背中を押されたかのように、襖障子を、そっと開けてみました。

誰もいません。いえ、悪魔君が、ぽつんと机の上に座っています。

私を見て、なぜか悲しそうに、クゥーとひと声鳴きました。その小さなお尻の下には、何か白いものがありました。何だかとても嫌な予感がして、私は、悪魔君を優しく抱き上げると、その白いものに、恐る恐る手を伸ばしました。封書でした。わたし宛です。あらましは、だいたい下の通りです。

「舞さん、私という人間は、どうやら神様の創った失敗作のようです。密かに志を立て、何ものかになろうとしても、何ものにもなれず、かといって、平凡な暮らしを夢見ても、そんな生活は、とても身の丈に合わず、この歳になるまで、結局、どっちつかずのボウフラみたいな人生を歩んで参りました。

私は思うのです。人間とは、何ごとかをなすために、この世に生まれたものだと、人間とは、何ものかになるために、生を受けた、唯一の生き物だと。

けれども、私は、何ものにもなれませんでした。この世のあらゆる門戸は、私に閉じられていたのです。

まるで、私は、果てしない荒れ野を、永遠にさすらう旅人のようです。ようやくたどり着いた、この野中の一軒家も、扉らしいものはどこにもなく、私は、窓辺に浮かぶ美しい人影を、ただ空しく見上げているしかありませんでした。

私がどこに行っても受け入れられないのはなぜでしょうか。根本的な原因は、一体どこにあるのでしょうか。たぶん、それは私の心の中にあるのでしょう。どうやら、私の心の中には、人々に敬遠される一匹の蛇が巣くっているようです。

いつかもお話ししたとおり、人間の心には、いつのまにか忘れられてしまった、重要な部分があります。ある意味では、それは我々の分身です。私は、その分身を探し求めて、人生という、途方もない長い旅路を、独り歩んできました。

そして、まったく偶然に、あなたという、分身に出会ってしまったのです。あなたは、私の持たないすべてを具備しています。いつも生きる力に満ちあふれ、まるで太陽のように、あらゆる人を慈しみ、照らしています。

私はあなたを見ているうちにようやく気づいたのです。私が世に入れられない理由、私に欠けているものが何かを。それは、エロスです。

もし、干からびた魂を癒すものをエロスと呼ぶならば、あなたは、それを人より多く持つ、希有な人間と言えるでしょう。あなたは、このみすぼらしい町を照らす、ほのかな灯火、転落者たちの傷ついた魂を、やさしく慰めるマリア観音です。

私はあなたに会うのが遅すぎました。自分の分身を目の前にしながら、一つになることが許されないとは、辛い話しです。私は、今のまま、一匹の蛇を、人間のもっとも暗い部分だけを抱えて、生きて行かねばならないのです。

生のもっとも暗い部分、それは、人間が本来持っている破滅への憧れです。破滅を怖れないからこそ、人間は、運命と闘い、これを克服しようとする。けれども、そこにひずみがあるのです。人々が、この暗い力だけに頼れば、世界は殺伐としたものになってしまいます。人が人を食う世の中が当たり前になってしまいます。ちょうど、今のこの国のように。

ですから、私を筆頭に、この国の人々は、みな犯罪者です。何しろ、人を食うことなど、へっちゃらなのですから。我々はみな人食い人種です。少しでも弱い心を持てば、たちまち食われてしまいます。私は、そんな人間でいることに、ほとほと疲れてしまったのです。

もう人生において、見るべきものは見ました。聞くべきことも聞きました。今は、何もしたくないし、何も考えたくありません。ただ、闇のように深い安息を欲するのみです。

お別れです。どうか猫をよろしくお願いします。あいつは、悪魔みたいな人間どもと違って、とても気のいい奴です。どうぞお元気で」

手紙が指を滑り落ちて行きました。それも気づかないほど、私は動揺していました。ただぼうっとするばかりで、頭の中には何も浮かんできませんでした。

次の瞬間、私は、階段を、何度も尻餅をつきながら滑り降りていました。私は何か叫んでいました。何か叫びながら走っていました。雨が降っていました。激しく降っていました。私は稲妻を見ました。雷鳴を聞きました。川音が近づいていました。

やはりあの方はいました。家からほど遠からぬところ、供米橋の欄干に寄りかかり、水量の増した川を、じっと暗く見つめていました。私は走りました。走ってあの人の腕にすがりつきました。

「お願いだから、馬鹿なことしないでよ。死んで何になるのよ」

あの人は、突然、私が現れ泣きじゃくるのを見て、大きな瞳に驚きの色を浮かべ、かすかに口をもごもごさせました。

その時、灰色の何かが、欄干にぴょんと飛び乗りました。悪魔君でした。私が戸口を開けたまま駆けだしたので、後を付けてきたのでしょう。悪魔君はご主人を見て、嬉しそうに、ミュウとひと声鳴きました。

ところが、雨でコンクリート製の欄干はとても滑りやすくなっていました。死に神さんと私が、危ないと思った瞬間、悪魔君はあしを滑らせて、お尻から川に墜ちて行きました。

死に神さんがとっさにその小さな体を掴みました。ああ、なんと言うことでしょう。バランスを崩して死に神さんまでが、猫と一緒に川に落ちてしまいました。

最終回（前書き）

死に神の恋　最終回
前回までのあらすじ

みどり濃い公園ににぽつんと建つひなびた食堂。そこに転がり込んだ、猫づれの風来坊、死に神さん、若奥さんの舞ちゃんと怪しい雰囲気。けれども、いつも死の影の寄り添う死に神さん、身分不相応と身を退く決意。

ある嵐の日、置き手紙を読んだ舞ちゃん、死に神さんが身投げするものと、あわてて雨の中を飛び出した。

何かとドジな死に神さん、すったもんだの末、舞ちゃんの目の前で、増水した川に、猫と一緒に本当に落ちてしまい…。

舞ちゃんと死に神さん、二人の淡い恋を通して、人間の深い孤独を見据える。

最終回

死に神の恋　最終回
前回までのあらすじ

みどり濃い公園ににぽつんと建つひなびた食堂。そこに転がり込んだ、猫づれの風来坊、死に神さん、若奥さんの舞ちゃんと怪しい雰囲気。けれども、いつも死の影の寄り添う死に神さん、身分不相応と身を退く決意。
ある嵐の日、置き手紙を読んだ舞ちゃん、死に神さんが身投げするものと、あわてて雨の中を飛び出した。
何かとドジな死に神さん、すったもんだの末、舞ちゃんの目の前で、増水した川に、猫と一緒に本当に落ちてしまい…。

舞ちゃんと死に神さん、二人の淡い恋を通して、人間の深い孤独を見据える。

「死に神の恋」　最終回

とんでもないことになりました。増水時のこの川で、数年前に人が実際に流されているのです。その男性の遺体は今も見つかっていません。太古の遺跡が散在するこの土地で、善福寺川は、今も昔と変わらぬ暴れ川なのです。

私は悲鳴を上げながら、死に神さんと悪魔君の行方を目で追いました。死に神さんは、悪魔君を抱えたまま濁流に流されて行きました。百メートルほど流され、それでも、本当に運良く、しだれ桜の枝に左手で掴まりました。悪魔君のおびえた鳴き声が哀れでした。

私は駆け着けました。駆けつけて、遊歩道の上でただおろおろとしていました。すると、死に神さんが、こちらを見上げ何か叫びました。でも、川音が激しくてよく聞き取れません。死に神さんは、もう一度、あらん限りの声を張り上げて言いました。

「人を、呼ぶんだ」

私は、はっとして、前掛けのポケットを探りました。そして、携帯を取り出すと、わななく手でボタンを押し、夫と義父に連絡を取りました。私の金切り声が聞きづらかったのか、二人は、事情がなかなか飲み込めないようでした。私はひどくいらいらして、とうとう、携帯を握りしめたまま、膝を折って泣き出してしまいました。

私は、柵の隙間から、恐る恐る二人を見ました。死に神さんは、相変わらず細い枝にぶら下がっていました。歯をぐっと食いしばり、必死に激流に耐えるその姿に、私は、相棒を守ろうとする強い意思を感じました。

水は刻々とその量を増していました。死に神さんの左手は、いったい、いつまで持つのでしょうか。運命は、文字通り、あの方の左手が握っていました。

私は激しさを増した雨にずぶぬれになりながら、声を嗄らして二人を励まし続けました。死に神さんはかすかに頷いたようでした。悪魔君の方は、主人に弱々しくしがみついているばかりで、もう鳴く元気もないようでした。

空しく時間が経って行きました。それは恐ろしい時間でした。流れることを忘れたような、凍り付いた時間でした。何もかもが止ま

って見えました。非現実的な世界の中で、時は停止し、まがい物の空間だけが、薄ぼんやりと広がっていました。

声が聞こえました。夫と義父が私の名を呼んでいます。わたしは弾かれたように立ち上がると、思いっきり叫び返しました。

「ここよー。早く来て、早く、早く」

木立の奥から、夫と義父を先頭に、男も女も店の者みながすっかりびしょ濡れになって駆けつけました。最後尾にはトイレの哲人さんがついています。

男の人たちは、柵を乗り越えると、コンクリートの護岸を、慎重に下りて行きました。護岸の斜面は、滑り止めのために、わざとでこぼこに造られてはいますが、雨でとても滑りやすくなっており、大変危険な状態でした。

「数珠繋ぎになるのよ」義母が叫びました。

そこで男の人たちは、夫を先頭に、前の人の腰に両手を回して、両足を踏ん張ることにしました。柵に背中をくっつけている健ちゃんを、義父や義母や私や皿洗いのおばさんが、寄ってたかって支えました。

夫は両腕を思い切り伸ばして、何とか死に神さんの左手を掴もうと努力しました。既に夫の足は激流に一歩踏み込んでいます。下手をしたら夫まで流されてしまいます。それほど足場の悪いところだったのです。義母も私も、目をつむり、ただただ神様に祈るばかりでした。

ようやく、夫の両腕が死に神さんの左手を掴みました。掴んだきり動けなくなりました。夫はかなり力持ちですが、激流にあらがって死に神さんの体を引き上げることは、さすがにできません。

五分が経ちました。十分が経ちました。そのままの状態が続きました。誰も動けません。誰も叫びません。不気味な沈黙の中で、ごうごうという水音だけが、みなの鼓膜を無情にふるわせています。

死に神さんは、水に体温を奪われ、顔も腕も既に蒼白で、唇だけが、別の生き物のように毒々しい紫色に変わっていました。危険な状態にあることは、誰の目にも明らかでした。

「どうするのよ。これじゃ引き上げられないじゃない」義母がヒステリックな声で叫びました。

「大丈夫だ。消防に連絡してある。きっと来てくれる」と義父がみなを励ましました。

斜面で踏ん張っている人たちの体力は、すでに限界に近づきつつありました。もし、誰かが力尽きて手を放せば、前の人たちは川に落ちてしまうでしょう。

「消防はまだですか。もう一度電話をしてください」列の中程で踏ん張っていたトイレの哲人さんが、大声で後ろに言いました。

義母が健ちゃんの首を左腕で絞めたまま携帯を取り出しました。焦っていたためでしょうか、義母はなかなかうまくボタンを押せませんでした。

ようやく119番につながると、義母はさっそく罵声を浴びせ掛けました。「何をぼやぼやしてんのよ。供米橋よ、供米橋。いったいいつ着くのよ」

消防署の説明に拠りますと、五分ほど前に消防車が出動したのですが、道が錯綜している上に幅員が狭く、とても供米橋まではいけないとのこと。

「車が入れなけりゃ歩いてくればいいでしょう」と義母はやり返しました。けれども、救助用の重い装備を抱えて、果たして間に合うかどうか。誰も口には出しませんでしたが、みなの心には、この灰色の空のように、重い不安の雲がたれ込めていました。

事態はいよいよ深刻になって行きました。死に神さんを掴んでいる夫の腕から、力が徐々に抜けつつあったのです。夫の疲労はすでに限界を超えようとしてました。

「旦那さん、もういい、こいつだけ頼みます」死に神さんが、震える唇で叫びました。

死に神さんの片腕の中で、悪魔君は、凄まじい水の脅威と必死に闘っていました。その小さな体を、死に神さんが、精一杯腕を伸ばして、夫の目の前にぶら下げました。夫は、恐ろしい選択を前にして、言葉もなく、ただあの方を見つめていました。

「旦那さん、頼む」死に神さんは弱々しくそう言うと、とても澄んだ目で、夫をじっと見ました。死に神さんは、内心ほっとしていたのかも知れません。生きるのにほとほと疲れ果て、これでようやく安息が得られると、ひそかに喜んでいたのかも知れません。

夫の目の前で、悪魔君は、美しい毛並みから、濁った水を滴らせ、鈍く光っていました。夫が、その小さな体を掴めば、死に神さんに最期が訪れます。

もう終わりです。とうとう、夫の右腕が悪魔君を掴みました。同時に、力尽きた左腕から、死に神さんの体が、滑るように離れて行きました。たちまち、死に神さんの黒い姿は奔流にのみ込まれ、みなの視界から消え去りました。

人々の悲鳴と嘆声が、鈍色の空の下に、一斉に上がりました。私は半狂乱になって下流へと駆け出しました。他の人たちも、苦しそうに息を切らせながら後についてきます。

川は遭難現場の下流で大きく右にカーブしています。そのカーブを曲がりきったとき、私たちは意外な光景を目にし、言葉もなくその場に立ち尽くしました。

レスキューでした。レスキュー隊が川にネットを張り、死に神さんの体を見事に受け止めたのです。さっそく命綱を付けた数名の隊員が、暴れ川に飛び込み、遭難者を確保しました。

レスキュー隊は、現場に直行しても間に合わないと判断し、遭難者が流されてくるのを下流で待つことにしたのです。さすがプロです。彼らの的確な処置により、死に神さんは、ようやく九死に一生を得たのでした。

それから。死に神さんと悪魔君は、ひどい風邪を引いて寝込んでしまいました。出発はしばらく延期されることになりました。元々行く当てなどなかったのですから、その方が良かったのです。

床に伏しているうちに、死に神さんのもとに朗報が舞い込みました。大阪にいる会社員時代の後輩が、行く当てのない死に神さんを気の

毒がり、しばらく居候させてくれることになったのです。死に神さんは、急きょ西に旅立つことになりました。

梅雨明け十日のさわやかな夏の夜、店の者とタクシー会社の人たちが集い、公園のバーベキュー広場で、死に神さんの壮行会が開かれました。

肉を焼く匂いが、心地よく鼻孔をくすぐる中、人々はたき火を囲んで、語り合い、笑い合い、そして、歌いました。空にはまん丸いお月さまが懸かり、その美しい夜の目で、人々を優しく見つめていました。黒々と寝静まった森は、梢をかすかにふるわせ、涼しげな風を人々のもとに届けてくれました。月夜に浮かれる烏たちは、カー、カーと、樹上で人々の歌声に和していました。

死に神さんは楽しそうでした。本当に心の底から笑っていました。私はほっとしました。死に神さんがまた妙な考えを起こすのではないかと、ずっと心配していたからです。

私の心には複雑な思いが去来していました。寂しさと安堵と後悔と、様々な感情がない交ぜとなって、しっとりと心を染めて行きました。そして、笑いの谷間に出合うたびに、その思いが胸に満ちて来て、ほうと、小さな吐息となりはき出されるのでした。

やがて、死に神さんは席を立ち、悪魔君とふたりで夜風に当たりに行きました。久しぶりに機嫌良く酔い、鼻歌などうなっています。私はそれとなく二人の後について行きました。

死に神さんは池の欄干にもたれて、水面に浮かぶお月さまを、無心に見つめていました。足下では、悪魔君が夏虫たちと楽しそうに

遊んでいます。私は、あの方の少し丸まった背中に向かって、ためらいがちに声を掛けました。

死に神さんは、口元に人なつこい笑みを浮かべ私を見ました。この無垢な笑顔が、永久に見られなくなると思うと、いよいよ苦しさが胸に募りました。

私たちは、水に揺らめく月を愛でながら語り合いました。青く透明な光が、二人を柔らかく包んでいました。夜の虫たちが、恋の歌をひそやかに歌っていました。森の静かな息吹が、梢をさわやかに渡って行きました。二つの魂は、自然と、人離れした、遠い彼方をさまよい始めました。

「ねえ、来世ってあると思う」ふと、思いがけない問いが、私の唇からこぼれ落ちました。

あの方は、ちらっと私を見て、薄く微笑みました。「よく分からない。けれども、あったらいいな、とは思う」

「私はあると思う。もし時間が無限に続くなら、私と姿形が同じ人が、心もまったく同じ人が、いつか、必ずこの世にまた生まれて来るはずでしょ」

「なるほど。確率的にはあり得るだろうね」

「そして、もう一度同じ人と巡り会うの。何億、何十億年かけて、心も体もまったく同じ人と、もう一度巡り会うの」

「それまでこの星はあるのかな」

「地球がなくなっていたら、他の星で巡り会えばいいわ」
「巡り会って、また別れるのかい」
「いえ、今度は、ずっと一緒よ。死ぬまでずっと…」
二人は互いの瞳の底に何かを認め、それから押し黙りました。
ぽちゃん。どこかで魚が跳ねました。水紋が緩やかに広がり、水の中のお月さまが、きらきらと揺らいでいます。私はその静かな影をじっと見つめ、少し沈んだ声で言いました。
「ねえ、もう死のうなんて思わないでね」
「うん？　何の話しだい」死に神さんは、私の横顔をきょとんと見て問い返しました。
「なに言ってるのよ。あんな手紙を書いておいて」
「ああ、手紙か、お別れのね」
「ねえ、そんなに死んじゃいたかった」
「えっ？」
「馬鹿よ。死んでも、何もならない。周りに迷惑をかけるだけじゃないの」
「なに、誰が死ぬって」
「とぼけないで。あんな遺書まで書いておいて」

「遺書！」静かな森に死に神さんの声が響き渡り、ねぐらの鳥たちを驚かせました。「僕は遺書なんか書いてない」

今度は私が驚く番でした。「あれは遺書じゃなかったの。もう生きるのが嫌になったって、書いてあったじゃない」

「誰も死ぬとは書いていない。あれは単なるお別れの手紙だよ。僕が出て行った後、あなたに読んで貰おうと思って書いておいたんだ」

「それじゃ、なぜ、あの時、ひとりで川を見つめていたのよ。まるで、これから飛び込むみたいだったわ」

「確かに、増水した川を見ているうちに、ここに飛び込んだら楽になるなあと、ちらりと思ったことは事実だよ。けれどもそのためにあそこに行った訳じゃない。僕は、大旦那の言いつけで川を偵察に言っただけだ。」

「だったら、どうして猫を置いていくのよ」私が半ばべそをかきながら尋ねると、あの人はおかしそうに笑いながら答えました。

「大旦那が、ぜひ、譲ってくれって言うからさ。行く当てのない人間と一緒にいるより、その方がこいつにとってもいいんだよ」と言って、死に神さんは、悪魔君の小さな頭を、優しく撫でました。

義父は、口うるさい義母に遠慮して、悪魔君を譲り受けることを隠していたのです。すべては、私の早合点でした。とんでもない思い違いをして、私は、死に神さんと悪魔君を、危うく死なせかけたのです。私はひどくしおれてしまい、自分のミスを、小さな声で謝りました。

死に神さんは少し口元をゆるめただけでした。そして、猫の頭をなおも愛おしそうに撫でながら、「こいつを、どうかよろしくお願いします」とだけ言いました。

悪魔君の方は、ごろごろと喉を鳴らして、相変わらず虫たちと楽しそうに遊んでいます。今宵が、ご主人様と過ごす、最後の晩となることも知らずに…。

翌朝。夏の煌めきが、木立に眩しくあふれるこの朝、死に神さんは、五万円で買ったという、赤帽印の古い軽トラックを店に横付けすると、貧しい荷物を、穴だらけの幌の中に積み込み始めました。

なにか手伝おうにも、二階と一階を二三度往復しただけで、僅かばかりの所帯道具はあっという間に片づき、誰も手伝えませんした。

後には私の腕の中に、悪魔君が残されているだけです。悪魔君はめまぐるしく動き回る死に神さんを、しきりとドングリ眼で追い、一緒に遊んで欲しいようでした。私が頭を撫でてあげても、小さなあしをばたつかせてむずかり、落ち着きません。

「それじゃ、皆さん、大変お世話になりました」

死に神さんが月並みな別れの挨拶をすると、あばよ、橋の下に戻るなよ、辛気くさいから黒い服ばかり着るな、猫は飯を作れない、人間と結婚しな、死に神は返上しろ、せめて貧乏神になれ、などとみな口の悪いはなむけの言葉を贈り、その場のしんみりとした雰囲気を、しばし明るいものにしました。

私は、せいせいとした顔をして微笑んでいました。けれども、目を合わせようともしない、あの方が小面憎く、また自分が惨めで、心の中では泣いていました。私は、やはり、あの方を愛していたのでしょうか。

今となっては、それはもう分かりません。おそらく、私は、あの方のうちに、自分の知らない何かを見て、それに引かれていたのでしょう。自分の知らない何かとは、あの方が、しきりと言っていた、自らの分身です。死に神さんと同じく、私も、もうひとりの自分に出会っていたのです。

死に神さんは終始笑顔でした。けれども、その大きな二重目が、かすかに潤んでいるのを、その場にいた人たちは見逃しませんでした。

「元気でやれよ、相棒」

死に神さんはそう言うと、悪魔君の小さな鼻面を指で軽く弾きました。悪魔君はちょっと面食らった顔をして、元ご主人の胸に抱かれようと、私の腕の中でもがきました。死に神さんは、泣きべそのような顔をし、それを見られないように、すぐに背を向け自動車に乗り込みました。

エンジンをかけると、パンパンという変な爆発音がしました。でも、ぼろぼろの軽トラックは何とか動き出しました。これで本当に大阪までたどり着けるのかしらと、みな一様に同じ心配をしながら、よたよたと動き出した車を見送りました。

「痛い」

突然、悪魔君が暴れ出し、鋭い牙で思いっきり私の腕を噛みました。そして、カールした自慢の耳を後ろにおったて、のろのろと進む軽トラックを、全速力で追い掛けました。ちりん、ちりん。俊足の悪魔君はすぐに追いつきました。追いつくと、車が止まって助手席のドアが開かれました。悪魔君はそこにぴょんと飛び乗り、同時にドアが閉められました。車がまた動き出すと、運転席の窓から、死に神さんが軽くみなに手を振りました。

パンパン。妙な爆発音と共に車が木立の蔭に消えると、急に蝉時雨が降り、同時に、しゅんとした寂しさがみなの心に訪れました。「あいつ、猫の便所を忘れて行きやがった」義父が白い眉を八の字にして呟きました。

それから。森の中にぽつんと建つこの食堂に、再び静かな時間が流れ出しました。そして、秋気が深まるにつれて、人々は、遠く去っていった人のことを、おぼろげな思い出として、記憶の片隅に片付け始めました。

私たち夫婦にも、静穏な日々が戻って参りました。夫は以前にもまして私を大事にしてくれて、私は私で、度量が大きく、勇敢な夫を、心から敬うようになりました。

死に神さんの救助活動の件では、現場にいた人たち皆が消防署から表彰されました。とりわけ夫は、危険きわまりない姿勢で、遭難者を力の限り支え続けたため、格別のお褒めの言葉を頂いたのでした。

それ以来、私は夫を誰よりも愛していることを、とても強く感じるようになりました。私は、世界で一番すばらしい男性と一緒になれたのです。女として、これほどの幸せは他にございません。今は

夫に二度目の恋をしている、と言ったら、皆さんはお笑いになるでしょうか。

この善福寺川緑地が、再び黄金色に輝き始めたある日、わたし宛に差出人のない封書が届きました。期待と不安とがない交ぜになり、もどかしげに封を切ると、ミミズとナメクジが仲良くダンスをしているような字が、目に飛び込んできました。死に神さんからでした。

なんでも、この秋から奈良のタクシー会社に就職し、再び運転手として働き始めたとか。今は櫻井市にあるその会社の寮で、悪魔君と一緒に暮らしているそうです。
死に神さんは奈良がとても気に入ったようです。

「奈良の秋はとても美しいです。この盆地を囲む、山という山、丘という丘が、ことごとく紅葉色に色づくとき、神霊の宿るなだらかな高見から、すがしい古代の息吹が静かに降りて来て、人々の暮らす平べったい大地を、おごそかな気で満たして行くのです。

すると、この盆地に眠る、無数の古代人たちの霊が、われわれの魂に深く染み入ってきて、無限の時間を超え、親しく語りかけてくるのです。ここには、人々の心を慰める何かがあります。

その何かとは、いったい何でしょうか。おそらく、それこそが、私があなたに強く感じていたもの、いわゆるエロスではないでしょうか。

実は、エロスは、この土地に限らず、世界にあまねく存在しているのです。この星に生命のある限り、あらゆる地にそれは存し、海も、山も、大地も、ことごとくその温もりで満たされています。

私は、あなたのうちに、エロスの姿を、垣間見ただけなのかもしれません。何しろ、それは、すべての生命に宿っているのですから。善人にも、悪人にも、正直者にも、嘘つきにも、蛙にも、蛇にも、わらじ虫にも、私の横で、腹を出して寝ている、変な猫にも、それは宿っているのです。

私は、皆さんに命を助けていただいたとき、初めてこのことに気づきました。私に欠落しているもの、生きる本能に根ざす尊いものは、すべての人の心の中で、日々あたたかく脈を打っていたのです。

私が求めてやまなかった己の分身は、あなただけではなく、この世で精一杯生きている、すべての人々のうちにあったわけです。

私は、今でもあなたを愛しています。いえ、今こそあなたを愛しています。なぜならば、私の心に、生きる力が甦ったからです。この新しい力と共に、あなたの面影は、私の心の中で、いつまでも、生き続けることでしょう。

相棒がのそのそ起きてきました。今宵は十五夜お月さん。酒もある、マタタビもある。これから、こいつと二人、月見としゃれ込みますか。そして、自分の片身を垣間見た彼の地に、遠く思いを馳せましょうか。いつの日か、どこかの星で、再び巡り会えると信じながら…。

貧乏神より」

マリア観音様へ

トイレの哲人さんにこの手紙を読んでお聞かせすると、哲人さんは垂れた細い目に笑みを含ませ言いました。

「なるほどね。あいつもやっと自分の分身と合体できたわけだ。けれども、死に神でいたときだって、あいつは世間の奴らよりはましな男だったよ」

「どうして」

「自分に欠けている部分があることに、奴は気づいていたからね。そのことにまったく気づかず、人を踏みつけにしても、何とも思わない人間が、世の中、あまりにも多すぎる。だから、世間が殺伐として来るんだよ」

「そうね。だから、踏みつけにされた若い人たちが、やけになって問題を起こすのかも。あら、下の方に追伸があるわ。いま新しい小説を書いています、題は、『死に神の恋』ですって」

「変な題だね」

「売れるかしら」

「まず売れないね」

「でも、私、読んでみたいわ。だって、私の相方が書いた小説ですもの」

死に神さんと悪魔君のご多幸を、心からお祈り申し上げます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9672g/

死に神の恋

2010年10月28日07時16分発行